

小神明遺跡群 V

—団体営小神明土地改良事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書—

〈九料遺跡（南側・昭和61年1月～2月調査）も含む〉

1987

前橋市教育委員会

小神明遺跡群 V

遺物観察表

1987

前橋市教育委員会

番号	器形	寸法	器形の特徴	整形・調整	①内色調②外色調③始土④焼成 ⑤残存⑥出土位置⑦その他	時代
3 トレ 妻 桙	壺 or 壺	19.5 18.5 17.0	底部平底。体部下半で直線的に外傾、上半で丸味。口縁部肉厚で短く、わずかに外傾。上端部丸い。	体部内外面ナダ調整。外面下端部ヘラケズリ痕を認む。底部外面一定方向ナダ調整。	① 10YR 7/4にぶい黄橙② 10YR 7/6 明黄褐③石英、酸化鉄、黒色粒子、輝石含やや雜④やや不良⑤ $\frac{4}{5}$ ⑥ 3 トレンチ裡面 床 + 2.0	中世 S
F 埋 土	土師器 壺 口 縁	16.7 — —	口縁部わずかに外傾。上端部で外反。器肉厚い。	口縁部内外面横位ナダ調整、肩部内部指オサニ成形後ナダ調整。外面ヘラケズリ調整。	① 10YR 7/4にぶい黄橙② 10 YR 7/3にぶい黄橙③紫蘇輝石、白色輝石、石英含密④やや不良⑤ $\frac{1}{10}$ ⑦ 口縁部内面板状	古 墳
F 122	土師器 手 捺 土 器	(6.3) 5.5 3.4	底部平底、体部直線的立ち上り、口縁部はわずかに内彎する。	体部外面指頭による斜位ナダ調整、内面同様に縱位ナダ調整(下から上)。	① 10YR 7/4にぶい黄橙② 10 YR 8/3 浅黄橙③紫蘇輝石、石英含密④やや不良⑤ $\frac{1}{10}$ ⑦ 体部外面一部板状	古 墳
F 336	土師器 手 捺 土 器	— — 4.3	底部平底。体部直線的立ち上り。	体部外面手捏痕顯著、横位ナダ調整(下から上)。	① 7.5YR 5/6 明褐② 10YR 8/3 浅黄橙③紫蘇輝石、石英、含密④やや不良⑤ $\frac{1}{10}$	古 墳
F 600	土師器 手 捺 土 器	— — 3.6	底部不安定な平底。器肉厚い。	体部外面指頭による斜、横位ナダ調整。底部内面ヘラナダ痕顯著。	① 10YR 7/4にぶい黄橙② 10 YR 7/3にぶい黄橙③紫蘇輝石、石英、白色輝石含密④や や不良⑦ 底部外面板状	古 墳
F 埋 土	龜 文 深 鈿 脚 部	— — —			① 7.5YR 5/4にぶい褐 ② 7.5YR 5/3にぶい褐 ③一部	加曾 E3 式 E4式
B トレ 河川部 妻 採	須恵器 頸 部	— — —	体部内彎し、肩部付近に最大径を有する。	内面指オサニ痕、外面ナダ調整。肩部に2本の沈線で区画し、連続刺突文をめぐらす。	① 10YR 6/1灰② 7.5YR 6/1灰 ③精密④良好⑤一部⑦ 内面自然釉付着	古 墳
D トレ 妻 採	燈明皿	(9.5) 2.1 (6.6)	底部平底。体部直線的立ち上り。器肉厚い。	ロクロ整形。底部右回転糸切り。	① 10YR 8/4 浅黄橙② 10YR 7/4にぶい黄橙③白色輝石 輝石含密④良好⑤ $\frac{3}{5}$ ⑦ 口唇部 タール状付着物	中 世
D トレ 妻 採	龜 文 深 鈿 底 部	— — —			① 2.5YR 5/6 明赤褐② 2.5YR 6/6 橙 ③一部	諸機 a式
D トレ 妻 採	龜 文 深 鈿 脚 部	— — —			① 5YR 6/4にぶい褐 ② 5YR 6/4にぶい褐 ③一部	諸機 a式
P-9 D-W 埋 土	須恵器 壺	12.0 3.2 6.2	底部上げ底。体部緩く彎曲。	ロクロ整形。底部右回転糸切り。	① 2.5YR 6/2灰黄② 5YR 6/1灰 ③黑色粒子含ほぼ密④良好 ⑤ $\frac{1}{5}$ ⑦ 体部内外面自然釉付着	平安
D- ^W _{5.4} D- ^W _{1.9} H- ^{2.1} H- ¹ H- ¹ H- ¹ H- ¹ H- ¹	須恵器 壺	— — — 0	底部丸底。体部は下半で直線的立ち上り。器肉一定。	胴部外面刷毛及びタタキ目模。内面上半ヘラナダ痕、下半あて甘痕。	① 2.5YR 7/2灰黄② 2.5YR 6/1灰 ③密④良好⑤ $\frac{2}{5}$ ⑥ D-W H-1, H-1 かまど内 にまたがり出土。	

番号	器形	寸法	器形の特徴	整形・調整	①内色調②外色調③胎土④焼成 ⑤残存⑥出土位置⑦その他	時代
D-W 埋土	土師器 环 墨書	一 — —		内面ナデ調整、外面ヘラケズ リ調整。	①7.5YR 7/6 橙②7.5YR 6/6 橙③紫蘇輝石、石英、軽石含 密④良好⑤一部⑥底部内面墨 書「真」	
D-W 534	土師器 环 墨書	11.7 3.5 8.5	底部不安定な平底。体 部極く變曲し、口縁部 は端部で内傾する。	体部内面ナデ調整。外面口縁 部横位ナデ調整。体部指オサ エ成形痕をのこす。底部ヘラ ケズリ調整。	①5YR 6/6 橙②5YR 6/6 橙 ③紫蘇輝石、石英、軽石含密 ④良好⑤床直⑥底部内面墨 書「真」	平安
D-W E 194	土師器 环 墨書	11.6 3.1 5.1	底部不安定な平底。体 部極やかに内傾して開 く。	体部内面ナデ調整。外面口縁 部横位ナデ調整。体部指オサ エ成形痕をのこす。底部ヘラケズ リ調整。	①5YR 7/4 にぶい橙②5YR 6/4 にぶい橙③紫蘇輝石、 軽石、石英含密④良好⑤床 直⑥底部内面墨書「真」	平安
D-W E 13	土師器 环 墨書	14.0 4.2 8.0	底部丸底気味。体部縱 く内傾。口縁部わざか に外傾。	内面ナデ調整後放射状にヘラ 磨き。外面口縁部横位ナデ。 体部～底部ヘラケズリ調整。	①5YR 6/4 にぶい橙②5YR 7/4 にぶい橙③紫蘇輝石、 石英、軽石含密④良好⑤完 形⑥床直⑦底部内面墨書「 日」?	奈良
D-W 509	土師器 环	11.5 3.2 8.0	底部不安定な平底。体 部内傾して立ち上り、 口縁部変換点でくびれ る。口縁部短く外傾。	内面ナデ調整、外面口縁部横 位ナデ調整。体部指オサエ後 軽いナデ調整か、 底部ヘラケズリ調整。	①5YR 6/6 橙②5YR 7/6 橙 ③紫蘇石、石英、軽石含密 ④良好⑤床直	
D-W 558	土師器 环	12.1 3.1 8.7	底部平底。体部極く内 傾し、口縁部変換点で くびれる。口縁部短く 外傾。	体部内面ナデ調整。外面口縁 部横位ナデ調整。体部～底部 ヘラケズリ調整。	①5YR 5/4 にぶい赤褐②5Y R 5/4 にぶい赤褐③紫蘇輝 石、白色軽石、石英含密 ④良好⑤完形⑥床直 ⑦体部一部煤付着。	平安
D-W N 3	土師器 环	(13.3) (3.0) (9.5)	平らな底部から、体部 丸味を有して立ち上る。 口縁部は短く外傾する。	体部内面ナデ調整。外面口縁 部横位ナデ。体部下半～底部 ヘラケズリ調整。	①5YR 5/2 灰褐②5YR 5/3 にぶい赤褐③紫蘇輝石、軽石 石英含密④良好⑤床+4	奈良
D-W E 181	土師器 环	13.7 4.3 8.2	底部不安定な平底。体 部内側。口縁部は上端 でわざかに内傾する。	体部内面ナデ調整。外面口縁 部横位ナデ、体部～底部ヘラ ケズリ調整。	①5YR 6/4 にぶい橙②5YR 6/4 にぶい橙③紫蘇輝石、 軽石、石英含密④良好⑤完形 ⑥床直⑦体部外面煤付着	平安
D-W E 266	土師器 环	11.7 3.4 8.6	底部平底気味だが、丸 味残る。体部内傾し、 口縁部短く外傾する。	体部内面ナデ調整。外面口縁 部横位ナデ調整。体部～底部 ヘラケズリ調整。	①5YR 6/6 橙②5YR 6/6 橙 ③紫蘇輝石、石英、軽石含密 ④良好⑤床直⑥底部内面 墨書	平安
D-W E 8	土師器 环	11.9 3.1 8.3	底部不安定な平底。体 部直線的立ち上り、変 換点で弱くくびれる。 口縁部上端でわざかに 直立する。	体部内面ナデ調整。外面口縁 部横位ナデ調整。体部指頭に よるナデ調整か。底部ヘラケ ズリ調整。	①5YR 7/4 にぶい橙②5YR 6/4 にぶい橙③紫蘇輝石、 石英、軽石含密④良好⑤床 直⑥底部内面 墨書	平安
D-W 335	須恵器 环	(11.8) 3.4 7.0	底部上げ底。体部は下 端で丸味を有した後、 直線的に立ち上る。	ロクロ整形。底部右回転条切 り。	①7.5YR 7/1 灰白②7.5YR 8/1 灰白③黒色藍物粒含密④極め て良好⑤床直⑥床直	

番号	器形	寸法	器形の特徴	整形・調整	①内色調②外色調③胎土④焼成 ⑤残存⑥出土位置⑦その他	時代
D-W 7	須恵器 环	(12.4) 4.1 6.2	底部わずかに上げ底。 体部下端部で丸みを有 した後直線的に立ち上 がる。	ロクロ整形。底部右回転糸切 り。	①7.5Y8/1灰白②5Y8/2灰 白③石茶合精良④良好⑤ ⑥床直溝内約13mmに覆り出 土	平安
D-W 225	須恵器 环	(13.4) 4.0 (7.6)	底部平底。体部は下端 部でわずかにくびれた 後、直線的に立ち上る。	ロクロ整形、底部右回転糸切 り。	①2.5Y8/2灰白②2.5Y7/2 灰黄③精良④良好⑤ ⑥床直	平安
D-W E 3	須恵器 环	(12.6) 4.5 (6.6)	底部わずかに上げ底。 体部下端部で、くびれ た後直線的に立ち上る。	ロクロ整形。底部右回転糸切 り。	①1.0Y6/1灰②5Y6/1灰 ③精良④極めて良好⑤ ⑥床直	平安
D-W E 28	須恵器 环	(14.0) 4.3 7.2	底部わずかに上げ底。 体部直線的に立ち上る。	ロクロ整形。底部右回転糸切 り。	①5Y8/1灰白②5Y8/2灰白 ③精良④極めて良好⑤ ⑥床直	平安
D-W E 37	須恵器 环	— 3.3 (6.1)	底部上げ底。体部直線 的に立ち上る。器内比 較的薄い。	ロクロ整形。底部右回転糸切 り。	①2.5Y7/1灰白②7.5Y7/1 灰白③黒色粒子含密④良好 ⑤⑥床直	平安
D-W 544	須恵器 环	(12.2) 3.3 7.0	底部上げ底。体部下半 丸く、上半部直線的に 立ち上る。 口縁部わずかに外反す る。	ロクロ整形。底部右回転糸切 り。	①2.5Y7/1灰白②5Y7/1 灰白③精良④極めて良好 ⑤⑥床直	平安
D-W E 69	須恵器 环	(13.0) 3.5 7.2	底部若干上げ底。体部 直線的。 口縁部外反する。	ロクロ整形。底部右回転糸切 り。	①N6/1灰②N6/1灰 ③白色鉛石、長石、黒色粒子 含密④極めて良好⑤⑥床直	平安
D-W 33	須恵器 环	12.0 3.7 8.0	底部平底。体部直線的 に立ち上る。	ロクロ整形。底部ヘラオシ 後再調整か。	①5Y7/1灰白②5Y7/1灰 白③精良④良好⑤⑥床直	奈良
D-W 320	須恵器 环	(12.9) 4.4 (7.0)	底部平底。体部やや深 く直線的に立ち上る。	ロクロ整形。底部切離し、技 法不明。	①2.5Y8/4淡黄②5Y7/1灰 白③チャート質粒、長石、輝 石含④やや粗⑤⑥床直 ⑦表面、底部磨耗	平安
D-W E 190	須恵器 环	— 3.6 —	底部若干上げ底。体部 直線的に立ち上る。器 肉一定。	ロクロ整形、底部ヘラオシ。	①5Y8/2灰白②5Y8/2灰 白③精良④良好⑤⑥床直	奈良
D-W 203 D-W E 6	須恵器 环	12.0 3.5 6.3	底部わずかに上げ底。 体部内彫し、口縁部わ ずかに外反する。	ロクロ整形。底部右回転糸切 り。	①5Y8/1灰②5Y8/2灰白 ③密④極めて良好 ⑤⑥床直	
D-W E 25	須恵器 环	13.4 3.7 7.2	底部わずかに上げ底。 体部直線的に立ち上り。 口縁部は頗る外反する。	ロクロ整形。底部回転ヘラケ メリ調整。	①5Y8/1灰白②5Y8/1灰 白③軽石、黑色粒子、舞石含 密④良好⑤⑥床直	奈良
D-W E 42	須恵器 环	(11.8) 3.4 7.3	底部わずかに上げ底。 体部下若干丸い。上 半直線的に立ち上る。	ロクロ整形、底部右回転糸切 り後、外周部手持ちヘラケズ リ調整。	①2.5Y8/2灰白②2.5Y8/2 灰白③チャート粒子、長石、輝 石、石英含密④良好	奈良

番号	器形	寸法	器形の特徴	整形・調整	①内色調②外色調③胎土④焼成 ⑤残存⑥出土位置⑦その他	時代
					⑤⑥床+6	
D-W 475 D-W E 166	須恵器 环	12 3.8 6.2	底部上げ底。体部直線的に立ち上る。	ロクロ整形。底部右回転糸切り。	①2.5Y8/1灰白②2.5Y2/1 灰白③精良④良好⑤⑥床直	平安
D-W 71	須恵器 环	12.2 3.7 7.2	底部平底。体部直線的に立ち上る。	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ調整。	①10YR7/1灰白②10YR 8/1灰白③小石、黒色粒子、 粗石含密④良好⑤⑥床直	奈良?
D-W E 152	須恵器 环	12.5 4.1 7.1	底部平底。若干の凹凸あり、体部ふくらみをもって立ち上る。	ロクロ整形。底部ヘラオコシ後再調整。	①2.5Y7/2灰黄②2.5Y7/1 灰白③石英、長石、小石含密 ④良好⑤⑥床直	奈良
D-W 52 D-W E 198	須恵器 环	11.4 3.5 7.3	底部平底、中央部突出する。体部下半部に丸みをもつが直線的に立ち上る。	ロクロ整形。底部ヘラオコシ	①10YR7/1灰白②10YR 7/1灰白③精良④良好⑤⑥床直	奈良
D-W 61 D-W E 28	須恵器 环	(12.5) 3.5 (7.6)	底部わずかに上げ底。体部直線的に立ち上り中位で振りをもつ。	ロクロ整形。底部右回転糸切り。	①5Y6/1灰②5Y6/2灰 タープ③粗石、長石、小石、 石英含やや粗、④良好⑤⑥床直	平安
D-W 540 D-W E 114	須恵器 环	- - -	底部上げ底。体部直線的に立ち上る。	ロクロ整形。底部右回転糸切り。	①10YR7/1灰白②10YR 7/1灰白③長石、酸化鉄、粗 石含密④良好⑤⑥床直⑦焼きひずみによるゆがみあり。	平安
D-W 76	須恵器 环	- 3.9 (6.3)	底部わずかに上げ底。体部直線的に立ち上り、口縁部は外反する。	ロクロ整形。底部右回転糸切り。	①2.5Y8/2灰白②2.5Y8/2 灰白③精良④良好⑤⑥床直	平安
D-W 12	須恵器 环	(12.3) 3.6 6.5	底部上げ底。体部わずかに内彎して立ち上る。器肉は一定。	ロクロ整形。底部右回転糸切り後、外周部回転ヘラケズリ調整。	①5Y7/1灰白②5Y7/1灰 白③石英、輝石、粗石粒含密 ④良好⑤⑥床+4	奈良
D-W 34.	須恵器 环	(13.7) 3.4 6.2	底部上げ底。体部下端物で弱く、くびれた後内彎して立ち上る。	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ調整。	①10Y7/1灰白②10Y6/1 灰③精良④極めて良好⑤⑥ 床直	奈良
D-W 670	須恵器 高台付 塊	(12.8) (3.8) (7.6)	底部平底。体部は下端部で弱くくびれた後、直線的に立ち上る。	ロクロ整形。底部ヘラオコシか。	①7.5YR7/4にぶい縫②7.5 YR7/4にぶい縫③長石、石 英、輝石含密④やや不良 ⑤⑥床直	奈良
D-W E 80	須恵器 高台付 塊	15.4 7.4 9.8	体部は若干丸みをもって立ち上る。高台部は端部で強く外彎する。	ロクロ整形、底部右回転糸切り後、高台部貼付再調整。	①2.5Y8/1灰白②2.5Y7/1 灰白③長石、粗石、酸化鉄含 密④良好⑤⑥床直	奈良
D-W 44	須恵器 高台付	(16.9) 7.8	体部はわずかに丸みをもって立ち上る。高台	ロクロ整形、底部右回転糸切り後、高台部貼付再調整。	①10YR8/1灰白②10YR 7/1灰白③小石含密④良好	奈良

番号	器形	寸法	器形の特徴	整形・調整	内色調②外色調③胎土④焼成⑤残存⑥出土位置⑦その他	時代
D-W E 257	鉢	10.8	底部は外傾して開いた後下端部で外反する。		⑤⑦ ⑥床直	
D-W E 39	須恵器 蓋	14.1 2.8 3.7	平坦面をなす天井部から体部は外傾して開き、端部はやや内傾する。瘤状ツマミ貼付。	ロクロ整形、天井及び外周部回転ヘラケズリ調整、体部外面ナデ調整。	① 10YR7/1 灰白② 10YR7/1 灰白③長石、輝石、輝石含、やや粗④良好⑤⑥ ⑥床+6	平安
D-W E 45	須恵器 蓋	17.6 4.3 4.2	天井部で小さく平坦面をなした後、体部は外傾して開き、端部は直立する。体部はやや深い。	ロクロ整形。天井部及び外周部回転ヘラケズリ調整。瘤状ツマミ貼付。	① 5YR8/1 灰白② 5YR7/1 明褐灰③精良④良好⑤⑥ ⑥床直	奈良
D-W 4 D-W E 48	須恵器 盤	(20.3) 3.9 6.5	不安定な底部分から体部は緩やかに内傾して立ち上る。	ロクロ整形。底部右回転糸切り後、外周部回転ヘラケズリ調整。高台貼付痕跡を認むが高台部は剥落している。痕跡部沈線状をなす。	① 5Y7/1 灰白② 5Y7/1 灰白③長石、小石、酸化鉄含密④良好⑤⑥ ⑥床直	奈良
D-W 660	須恵器 蓋	(14) (2.7) 3.4	平坦面をなす天井部から体部は外傾して開き端部は直立する。ボタン状ツマミ貼付。	ロクロ整形、天井部外周回転ヘラケズリ調整。	① 7.5Y8/1 灰白② 7.5Y8/1 灰白③精良④良好⑤⑥ ⑥床直	平安
D-W E ベルト 埋土 小壺	須恵器	— — —	体部直線的に立ち上り肩部で強く内傾した後口縁部は短く直立する。	ロクロ整形、体部下端ヘラケズリ調整。	① 5YR8/1 灰白② 5YR8/1 灰白③石英、黒色粒子、輝石含密④良好⑤⑥ ⑥床直	平安
D-W 624	灰釉陶 器瓶	— — —	肩部のみ残存。	内面接合痕顯著。内面ナデ調整。	③精良④良好⑤一部 ⑥床直	平安
Dトレ 試張部 表 接	蓋	7.8 18 3.8	平坦な底部分から大きく外反し、上端で短く直立する。外側中央部釘状のツマミを有する。	ロクロ整形。下端部右回転糸切り。	① 7.5YR8/2 浅黄橙 ② 7.5YR8/2 浅黄橙③精良 ④良好⑤⑥ ⑦中世陶器	中世?
Dトレ 試張部 表 接	扁文 ?	— — —			① 7.5YR8/3 浅黄橙 ② 7.5YR7/3 にふい紋 ③一部	扁文期
H--1 385	須恵器 坏	(11.6) 3.1 7.5	底部は中央部で突出する。体部直線的に立ち上る。	ロクロ整形。底部ヘラオコジ。	① 5Y6/1 灰② 5Y6/1 灰 ③精良④極めて良好 ⑤⑥ ⑥床+5	奈良
H-1 245	須恵器 高台付 鉢	(16.6) 7.1 9	体部は若干のふくらみを有するが、ほぼ直線的に立ち上る。高台部は内外面共に外傾して開く。叢付はわずかに凹む。	ロクロ整形。底部回転ヘラケズリ調整。高台部貼付。	① 5Y6/1 灰② 5Y7/1 灰白 ③精良④⑤極めて良好 ⑤⑥ ⑥床直	奈良
H-1 339	須恵器 高台付	13.6 5.1	いわゆる船型を呈し、体部下半で大きく開い	ロクロ整形、底部回転ヘラケズリ調整。	① 10GY6/1 灰灰② 10GY6/1 灰灰③精良④極めて良	奈良

番号	器形	寸法	器形の特徴	整形・調整	①内色調②外色調③粘土④焼成 ⑤残存⑥出土位置⑦その他	時代
	鉢	8.9	た後唇曲して直線的に立ち上る。高台部はわずかに外傾し壇部は平ら。		好 ⑤ ⁷ ₈ ⑥床直 ⑦底面外面ヘラ記号「人」	
H-1 514	須恵器 蓋	14.8 3.5 4.3	天井部から緩やかに外傾して開き、底部は直立する。かえしはなく環状のツマミ貼付。	ロクロ彫形、天井部周回転 ヘラケズリ調整。	①5Y8/1灰白②2Y8/1灰 白③粗石、小石含や粗 ④良好⑤ ³ ₄ ⑥床直	奈良
1トレ 南表探	石斧	長11.3 幅4.9 厚1.5			N3/1灰 ⑥完形 ⑦打製	
1トレ 沼地南 埋土	石斧	長11.9 幅6.3 厚2.5			2.5GY6/1オリーブ灰⑥完形 ⑦打製	
1トレ △点南 埋土	1錢 硬貨	径1.6			⑦昭和16年発行の1錢硬貨	
2トレ 北部表 探	石斧	長14.5 幅6.5 厚2.3			2.5GY7/1明オリーブ灰 ⑥完形 ⑦打製	
2トレ ABト リ開 表探	石斧	長10.4 幅4.75 厚2.15			N3/1暗灰 ⑥完形 ⑦打製	
2トレ 南表探	石礪	長2.1 幅1.55 厚0.4			10Y5/1灰 ⑥完形 ⑦無基	織文
Aトレ 川西表 探	石斧	長10.7 幅7.2 厚2.8			2.5G5/1オリーブ灰 ⑥完形 ⑦打製	
D-W 583	管珠	長1.9 径0.5 穴0.25			5G2/1黒墨 ⑥完形 ⑦床+2	
D-W 埋土	石臼丁	長4.7 幅3.05 厚0.7			⑦7.5YR3/1黒褐 ⑥完形	
D-W E49	石斧	長一 幅6.8 厚2.5			5Y4/1灰 ⑥ ¹ ₂ ⑥床直 ⑦打製	
D-W 324	圓石	長9.5 幅7.5 厚3.7			7.5Y8/1灰白 ⑥完形 ⑥床+5	
D-W 532	寶水酒壺	径2.8			⑦正字(11波)銅。明和6年 (1769年)	

番号	器形	寸法	器形の特徴	整形・調整	①内色調②外色調③胎土④焼成 ⑤残存⑥出土位置⑦その他	時代
P-14	黒耀石 埋 土 銅 片	— — —				龜文
P-15	長石(?) 埋 土 銅 片	— — —			5Y8/1 灰白	
H-1 505	筋鑄車	上 2.6 下 4.1 厚 0.9 穴 0.8	断面台形状。上・下径部ともにシャープな平面をなす。	側面、圓取りされている。上・下径面及び側面は製作時の調整痕著しい。	5BG 2/1 青黒 ③片岩質か ④完形 ⑤床+3.0	
H-1 床 下 埋 土	砥 石	長 8.1 幅 4.8 厚 1.0			10YR7/4に赤い黄橙 ⑤床下	
H-1 195	寛 水 通 宝	径 25			⑥床+3 ⑦(新寛永銭)背文 銅 寛文8年(1668年)江戸 鬼戸にて鋳造。以後全国で鋳造(200年間)	
H-1 71	黒耀石 銅 片	— — —			⑥床+1.2	龜文
H-1.2 東 外 表 探	黒耀石 銅 片	— — —				龜文



小神明遺跡群 V

1 9 8 7

前橋市教育委員会

序

ここ、前橋の芳賀地区は、平安時代の「倭名類聚抄」に芳賀郷として名をとどめ、さらに、日照時間が全国屈指ということや、井戸からも良水が出るということ、また、各時代の遺跡の存在から、縄文時代より人々の生活に適していたことがわかります。

この地の調査は、古墳の調査の他は、昭和48年から始まった芳賀北部団地遺跡から開始されました。

その後、芳賀西部・東部を経て、奈良三彩小壺が出土した桧峯遺跡、そして、端氣・小神明地区の土地改良事業に伴う発掘調査へと続き、少しずつ芳賀の地の歴史が解明されつつあります。

本報告書は、昭和60年度・61年度小神明地区土地改良事業に伴うもので、切土部分と、道路・導水路予定部分についての発掘調査に基づいたものですが、特に今年度は、昭和57年から始まつた小神明地区土地改良事業の五年次で最終年にあたります。

本遺跡の詳しい内容は本文にゆずりますが、住居址、掘立柱建物跡、井戸、溝、土坑、ピットといった遺構が発見され、特にDトレンチの溝からは、流れ込みとみられる多量の須恵器や、墨書きされた土師器などが検出されました。

それらを、記録保存という形で、本報告書にまとめました。

斯し学に少しでも役立てれば幸いに思います。

最後に、酷暑や厳寒の中、発掘調査や報告書の発行にたずさわった担当者、作業員の方々、また、終始御助言、御協力をいただいた土地改良区の役員の方々、土地改良連合会や地元の方々に厚く御礼申し上げます。

昭和62年3月25日

前橋市教育委員会

教育長 岡本信正

例　　言

1. 本書は、昭和61年度団体営小神明地区土地改良事業に伴う。小神明遺跡群Vの発掘調査報告書である。略称は61-C-4である。諸般の事情により昭和60年度調査の一部(九料遺跡南側)を含む。
2. 小神明遺跡群Vは、以下の土地に所在する。
小神明遺跡群V 前橋市小神明町字合田631番地 外63筆
3. 調査面積は11,000m²である。
4. 本発掘調査は、土地改良事業により遺構が直接破壊を受ける部分について、前橋市教育委員会が、国、県補助金、市費により、又、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が、小神明土地改良区よりの委託金により実施したものである。
5. 発掘調査は、昭和61年6月30日から10月4日まで実施した。整理作業は、10月6日から、昭和62年3月25日まで実施した。
6. 本書は、昭和61年度発掘調査の記載を主とし、これに昭和61年1月～2月に調査した九料遺跡南側の発掘成果を加えたものである。
7. 本報告書中の土色及び、遺物観察表中の内色調・外色調は、「新版標準土色帖」(小山、竹原1970)に基づいている。
8. 調査組織　社会教育課長　米倉　忍、社会教育課長補佐　中嶋隆二・鈴木幸三、主幹　加藤鶴男、文化財保護係長　福田紀雄　担当者　桑原　昭・新保一美
9. 本遺跡の資料は、前橋市教育委員会の管理下に保管されている。
10. 発掘調査作業員（順不同）
中島つる、横堀ます、平林ふさ、中島幸重郎、古松英太郎、角田もと江、五十嵐くま、大沢はづ、鈴木孝子、平林たか、平林チヨ子、松村ふさ、鈴木八重子、佐藤真寿雄、佐藤佳子、柴崎香代子、稲葉義則、後藤伴作、糸井朱美、奈良桂子、安藤紀郎、原　佳弘
11. 遺物整理及び報告書作成作業員（順不同）
角田もと江、佐藤佳子、糸井朱美、稲葉義則、大塚美智子、松田富美子
12. 発掘及び遺物整理においては、次の諸氏から、御指導、御助言、御協力をいただいた。心より感謝を表する次第である。
小神明土地改良区、群馬県七地改良連合会、土地改良課、小神明町自治会長宮内慎一、竹内敏江、綿貫綾子
13. 執筆分担は以下のとおりである。
遺物観察表は綿貫綾子・佐藤佳子が作成し、編集・原稿執筆は桑原　昭・新保一美が行なった。

目 次

序 文	前橋市教育委員会 教育長 国 本 信 正	I	
例 言		II	
目 次		III	
凡 例		IV	
小神明遺跡群V			
I 発掘調査の経緯		1	
II 遺跡の位置と環境		2	
III 土層と地形		3	
IV 発見された遺構と遺物		5	
1 トレンチ	5	C トレンチ	13
2 トレンチ	7	D トレンチ	14
3 トレンチ	9	D トレンチ拡張部	22
水路1 トレンチ	10	土坑 (D 1 ~ D 6)	22
水路A トレンチ	10	ピット群 (P 1 ~ P 20)	23
水路2 トレンチ	10	第1号掘立柱建物跡	23
F	12	第1号住居址	24
A トレンチ	12	第2号住居址	28
B トレンチ	13	第3号住居址	30
Vまとめ			31
写真図版			1 ~ 4
九糸遺跡（南側）			
I 遺跡の概要		1	
II 代表的な遺構・遺物		3	
第1号集石	3	第69号住居址	6
第88号住居址	3	第80号住居址	9
第89号住居址	4		
IIIまとめ			12
写真図版			1 ~ 4
付図	小神明遺跡群V遺跡全体図		
別冊	遺物観察表		

凡　例

- 各遺構の縮尺は、1/60を基本としている。かまどについては1/30、溝平面は1/120である。
- 各遺物の実測図は $\frac{1}{4}$ 、拓本は $\frac{1}{2}$ であるが、特殊なものについては $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{6}$ 、 $\frac{1}{3}$ とし、図面に示した。
- 遺構平面、断面におけるスクリーントーンは、以下のように使用した。他の表示方法についても、前橋市教育委員会発行の他の報告書と同様である。灰陶陶器については、704を使用した。

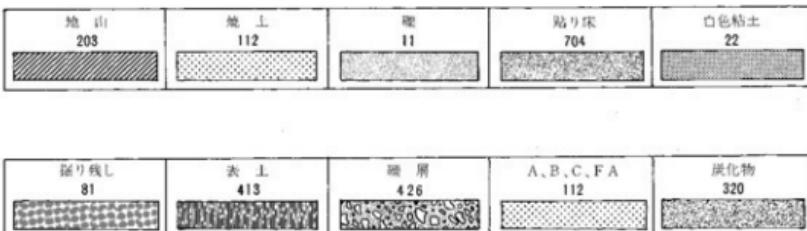


図1 スクリーントーン使用例

- 水系のレベルは、原則として各遺構ごとに統一した。
- 九料遺跡（南側）については、本報告書の他に、小神明遺跡群IV（1986年刊行）に、遺物分布図と写真図版が掲載されている。

I 発掘調査の経緯

小神明地区では、昭和57年度から土地改良事業が実施されている。それに伴い、埋蔵文化財の発掘調査が実施され、本報告書は、その5年次であり、最終年にもあたっている。

昭和61年度の調査に至る経過及び調査の経緯は以下の通りである。

昭和61年5月6日（火） 昭和61年度土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査打合わせ会議が土地改良区、群馬県土地改良連合会、土地改良課、文化財保護係の間で持たれ、今年度の事業実施地区と発掘調査地区が決まる。

農作業の関係から麦刈り取り後となる。

5月12日（月） 小神明土地改良区から発掘調査依頼がくる。

5月15日（木） 群馬県土地改良連

合会による輜杭設

置。

5月27日（火） 小神明土地改良区
と委託契約締結。

6月13日（金） プレハブ建設。

6月16日（月） 引越。

6月23日（月） トレンチ設定開始。

7月10日（木） トレンチ設定終了。

6月28日（土） 発掘前の写真撮影。

6月30日（月） 重機掘削・作業開始。

7月22日（火） 重機掘削終了。

7月21日（月） 各トレンチ地断線引き開始。

8月12日（火） 各トレンチ地断線引き終了。

7月23日（水） 各トレンチ地断実測開始。

8月26日（火） 各トレンチ地断実測終了。

8月25日（月） 住居址他調査開始。

8月26日（火） 各トレンチ地断注記開始。

10月2日（木） 各トレンチ地断注記終了。

10月6日（月） 発掘調査終了。整理作業開始。

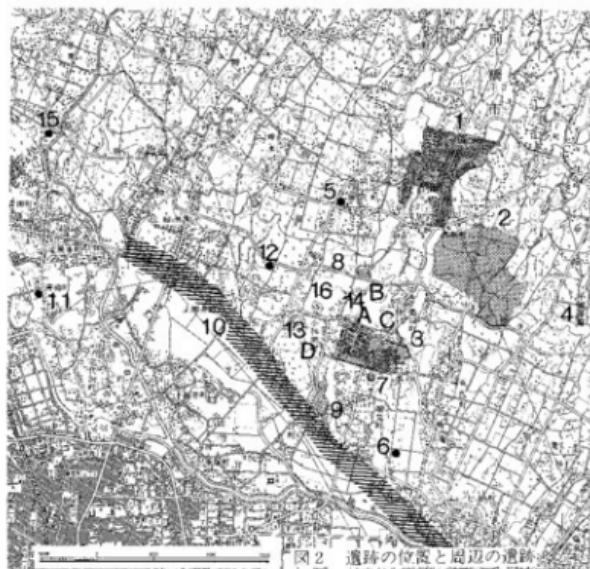
昭和62年3月25日（水） 報告書刊行。

測量基準点については、水準を「小神明土地改良事業現況平面図」のBM6、141.857mより、係員により移動。国家座標は測量会社に委託して設定した。

(A-1) X = +46500 Y = -66000

真北から17°59'09"東

II 遺跡の位置と環境



1. 芳賀北部団地遺跡 (48, 49)
2. 芳賀東部工業団地遺跡 (51-55)
3. 芳賀西部工業団地遺跡 (50)
4. 案革遺跡 (56)
5. オブ羅古墳
6. 大日塚古墳
7. 義勝寺
8. 小神明遺跡群 (57)
9. 煙竈遺跡群 (57, 58)
10. 古利根川左岸
11. 青柳寺跡 (58)
12. 南田ノ口遺跡 (59)
13. 小神明遺跡群 (59)
- 谷向遺跡
14. 小神明遺跡群 (60)
- 湯気遺跡
15. 引切城遺跡 (60)
- A:金木遺跡 (58)
- B:九科遺跡 (58, 60)
- C:西田遺跡 (58)
- D:大明神遺跡 (58)
16. 小神明遺跡群 (61)



市の中心部から赤城山に向かうと、水田が途切れ、崖になっている所にあたる。これは旧利根川によってつくられた崖である。その上は赤城山の噴出物による台地で、中小の河川により樹枝状に削られている。

本遺跡群は、この崖より北に1kmほどのぼった標高130mから140mのところにあり、周囲には縄文時代から中・近世に至る遺構、遺跡が密集している。

現状は桑畠と水田。

III 土層と地形



図4 標準土層対照図



写真2 地断(南から)

本遺跡の調査は、土地改良事業を原因とするため、その性格上調査区域が広範囲にわたっている。したがって、各調査地点で大きな土層変化が予想されるため

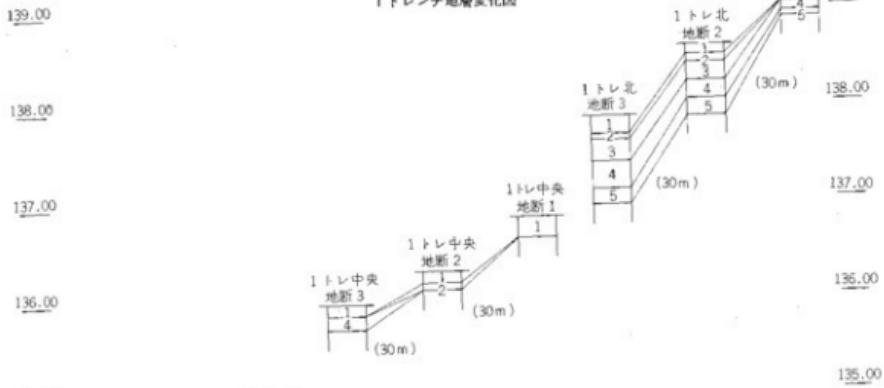
各地区的トレンチごとに標準土層を設定し、後に遺跡全体の土層を照合することにした(挿図4・5・6)。

遺跡全体の全トレンチの地断に線引きし、注記した所、土層は合計で60層余りを数えた。それらを大別すると上記のように10層にまとめられる。上記注記番号は、挿図4・5・6に共通である。挿図5の東西方向地層断面の変化図の観察からは、平安時代の凹凸のようすがわかる。挿図6の南北方向地層断面の変化図についても、同様に平安時代の地形が観察される。



図5 地形と土層対照図

1 トレンチ地層変化図



2 トレンチ地層変化図

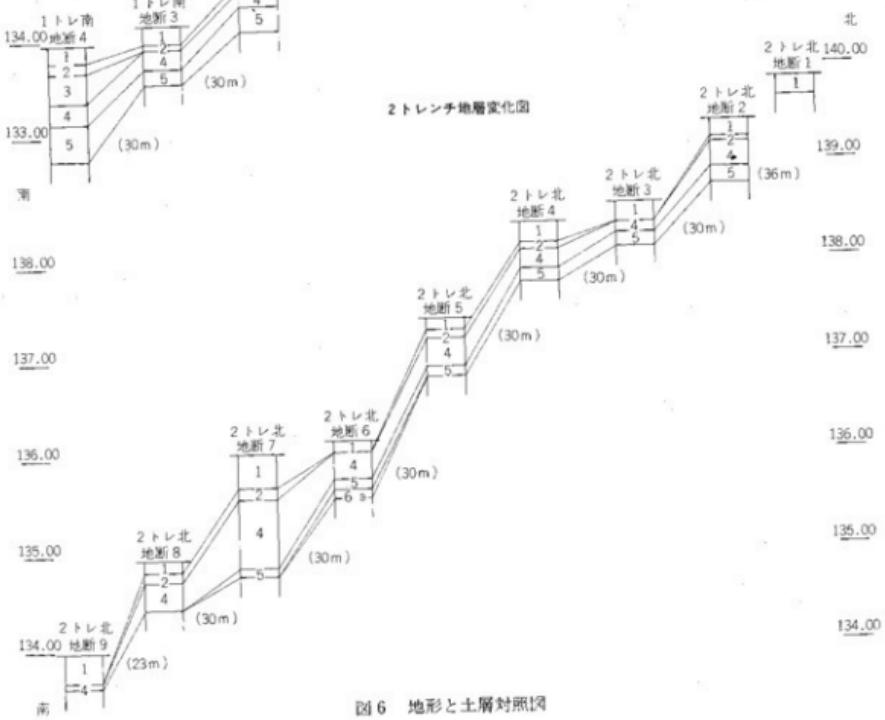


図 6 地形と土層封照図

IV 発見された遺構と遺物

1 トレンチ



写真3 1トレンチ（西から）



写真4 喧渠（東から）

1トレンチは、遺跡の東に位置し、南北に走る、道路及び導水路予定地部分である。

検出された遺構としては、本トレンチ北側にある暗渠が1つ（挿図8）あり、確認された遺構としては、本トレンチ南端の河川跡（挿図8）が1条ある。

暗渠は、松の木が構築材として使用されており、残存状態も良好なものであった。上端間の幅は、38cm～63cmあり、下端間は約10cm前後ある。上端から底部までの深さは、10.5cm～29.2cmをかる。

Aトレンチとの交点より北にあり、現石橋の南で検出されたローム段丘面（挿図8）は、既に、この地に、人の手が加えられていることを推定させる。

本トレンチの地表から地山まで、覆土は9層数えられ、そのうちの第6層がB軽石純層となっている。B軽石純層は、本トレンチのAトレンチとの交点より南5m付近から南端にかけてと、本トレンチのA

トレンチとの交点より北40m付近から北にかけて検出された。中央付近一帯はB軽石ではなくローム層が検出された。地表から地山までの深さは10cm～120cmと幅がある。

出土遺物 本トレンチ南から打製石斧（表採）、沼地より南付近で打製石斧（埋土）検出。Aトレンチとの交点より南から昭和16年の1銭硬貨（埋土）検出。これは戦中のみ使用。この時期削平か。

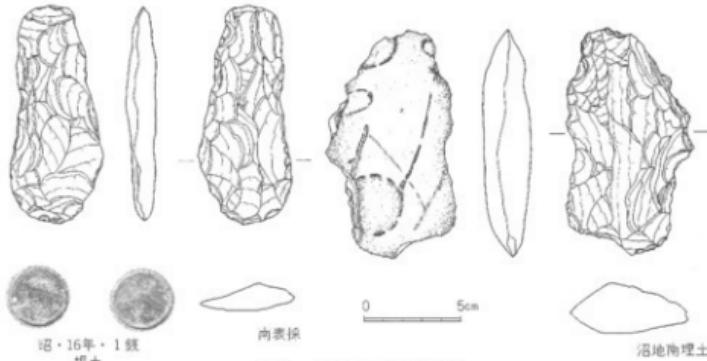
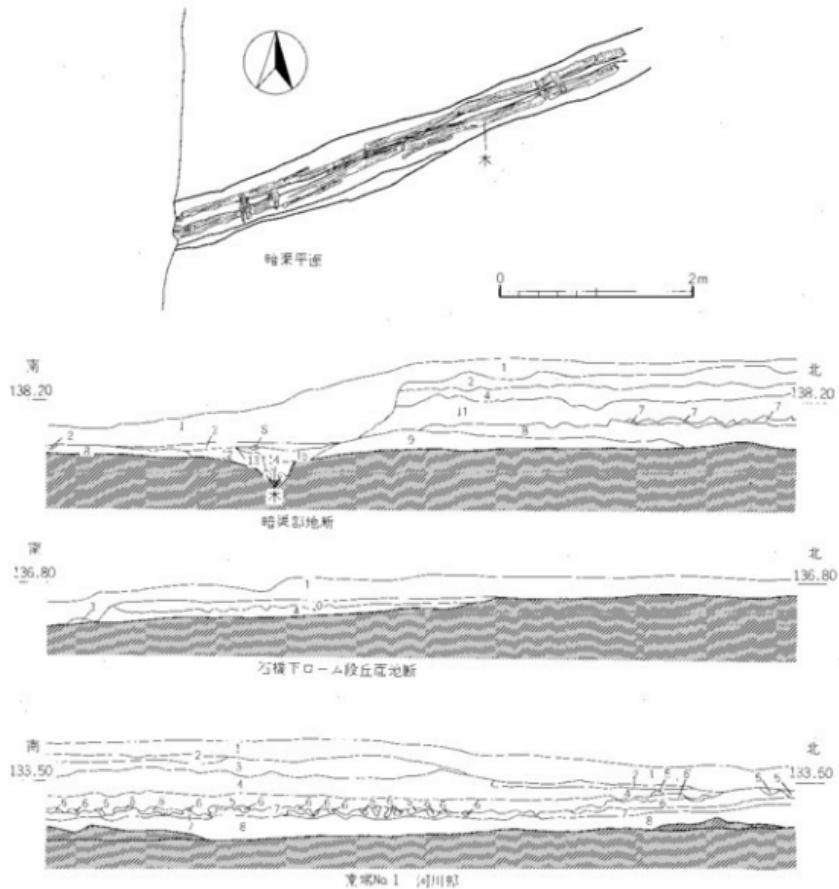


図7 1トレンチ出土遺物



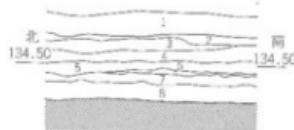
- | | |
|--|---|
| 1. 灰褐色 10YR 5% 耕作土。 | 8. 暗灰色 10Y R 5% 黏性しまり強。φ1~2mmの礫1%。軽石1%。粘土質の土。 |
| 2. 橙色 7.5YR 5% 不透水層。 | 9. 黒褐色 10Y R 3% 黏性強しまりやや強。φ1~5mmの軽石ごく少量。 |
| 3. 棕色 10Y R 5% 黏性なし。しまり強。φ1mm以上の軽石2%。φ1~5mmの礫2%混入。 | 10. 水褐色 5 YR 5% 不透水層。 |
| 4. 黑褐色 10Y R 5% 黏性弱しまり強。φ1~20mmの軽石1%混入。礫を含まない。 | 11. 黑褐色 10Y R 5% 黏性しまり強。φ1~10mmの軽石40%。 |
| 5. 黑褐色 10Y R 5% 黏性弱しまり強。B軽石多量に含む。その他の軽石1%混入。 | 12. 黑褐色 10Y R 5% 黏性しまりやや強。軽石ごくわずか。 |
| 6. にくい黄褐色 10Y R 5% B軽石純層。 | 13. 黑褐色 10Y R 5% 黏性やや強。鉄分ブロック10%。軽石微量。 |
| 7. 灰褐色 7.5YR 5% Bアッシュ純層。 | 14. 暗褐色 10Y R 5% 黏性しまりやや弱。軽石微量。 |
| 7. 黑色 10Y R 5% 黏性有しまり強。のう上。礫2%含む。 | 15. 暗褐色 10Y R 5% 黏性しまりあり。 |

図 8 1 トレンチ土層図

2トレンチ



写真5 2トレンチ（南から）



- | | |
|-----------|--------------|
| 1. 耕作土層 | 5. FP層 |
| 2. 不透水層 | 6. FA層 |
| 3. B軽石その他 | 7. C軽石層 |
| 4. B軽石層 | 8. 強粘性黒褐色河床土 |

図9 2トレンチBtr交点南
水成不整合面

2トレンチは、遺跡のほぼ中央にあり、南北に走る道路と導水路予定地部分である。2トレンチの北側部分では多数の川原石が検出され、南では河川跡も確認された。

2トレンチは、中央よりやや南の地点で現小河川と重なる。小河川との交点より北側一帯の地山はロームで覆われている。そして、一部に水成不整合面（挿図9）が見られた。

Dトレンチとの交点よりやや南付近で河川跡（挿図11）が確認され、その付近より南側一帯はロームで覆われている。また、Dトレンチとの交点より南側付近では、B軽石層が検出された。

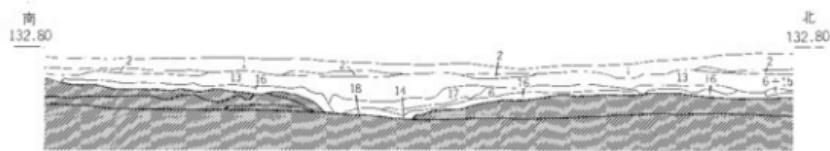
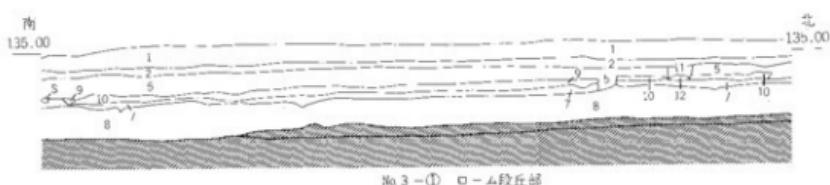
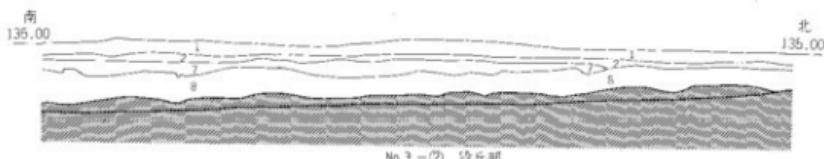
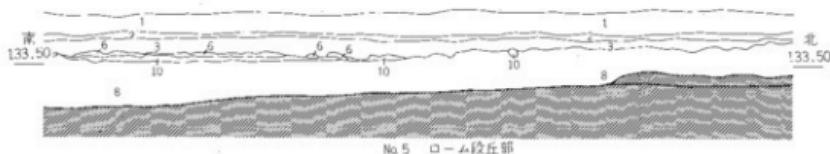
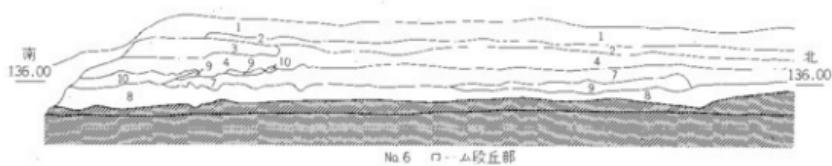
ところで、いくつものローム段丘面（挿図11）が認められることから、既にこの地が、削平を受けていたことがわかる。

覆土は地表から地山まで8層を数える。地表から地山までの深さは19cm～132cmと幅がある。

出土遺物 南から無茎石錐（表採）、北では打製石斧（表採）、A・Bトレンチ交点間から打製石斧（表採）が検出。



図10 2トレンチ出土遺物



- | | | |
|------------------------------|---------------------------------|---|
| 1. 灰黃褐色 10YR 5% 耕作土。 | 9. 黑褐色 10YR 5% 酸化土多量に混じる。輕石40%。 | 15. 灰褐色 7.5YR 5% Bアッシュ純層。 |
| 2. 棕色 7.5YR 5% 不透水層。 | 10. 黑褐色 10YR 5% 酸化土なし、輕石40%。 | 16. 黑色 10YR 5% のろ上。粘土質の土。輕石20% 輕2%混入。 |
| 3. 黑褐色 10YR 5% 酸化土40% 輕石5%。 | 11. 黑褐色 10YR 5% 粘性しまり強、輕石20%。 | 17. 喀褐色 10YR 5% 粘性強。しまり非常に固、ザラザラしている、酸化土5%。 |
| 4. 黑褐色 10YR 5% 酸化土+10% 輕石7%。 | 12. 黑褐色 10YR 5% 粘性しまり強、輕石50%。 | 18. 黑褐色 10YR 5% 粘性強くしまり非常に固い、ザラザラしている。 |
| 5. 黑褐色 2.5YR 5% 酸化土5% 輕石10%。 | 13. 黑褐色 10YR 5% Bを多量に含む。輕石2%。 | |
| 6. 暗灰黃褐色 2.5YR 5% B輕石純層 粗砂。 | 14. 黑褐色 10YR 5% 15層よりBの混入が多い。 | |
| 7. 黑褐色 10YR 5% 輕石50%。 | 15. 黑褐色 10YR 5% 輕石ごくわずか含む。 | |
| 8. 黑褐色 10YR 5% 輕石5%。 | | |

図11 2トレンチ土層図

3トレンチ



写真6 3トレンチ（南から）

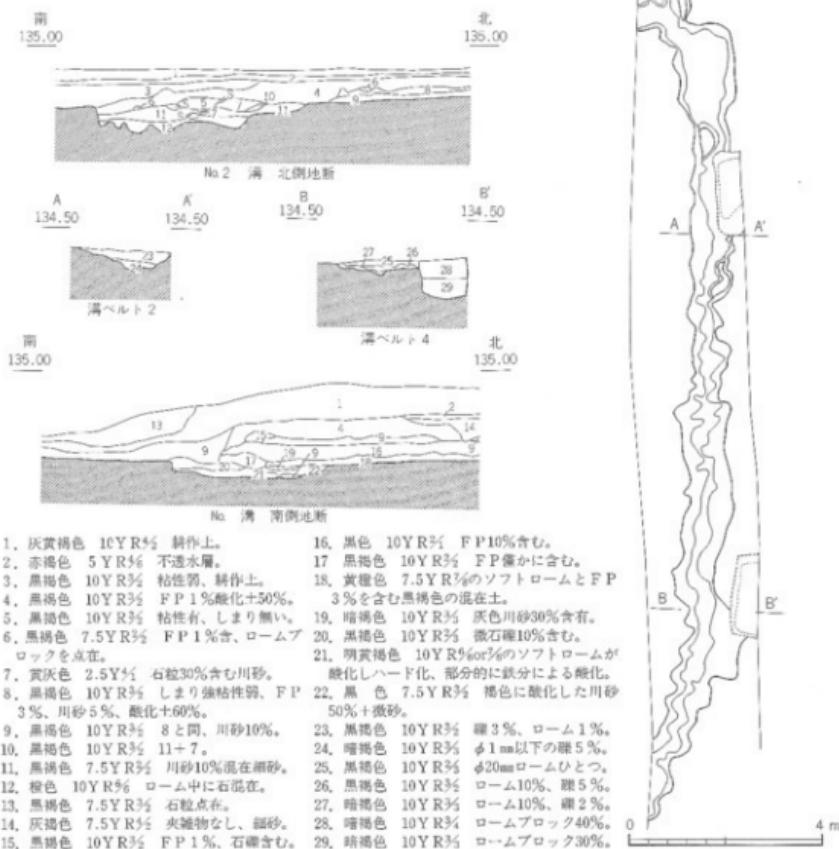


図12 3トレンチ溝

水路1トレント

水路1トレントは、遺跡の西よりにあり、また、遺跡の中央より北にかけて南北に走る導水路予定地部分である。遺構は、河川跡が1条確認された。地山は、水路Aトレントとの交点より北がシルトで覆われ、水路Aトレントとの交点より南はローム等により覆われている。地表から地山まで9層が数えられる。地表から地山までの深さは、24cm～132cmと幅がある。遺物は、全く検出されなかった。

水路Aトレント

水路Aトレントは、遺跡の西よりに位置し、遺跡中央より北にあり、水路1トレントと水路2トレントの間を東西に結ぶ導水路予定地部分である。水路2トレントで検出された溝（挿図13）の延長が、本トレント西端で確認された。地山は、シルト質の土等で覆われている。地表から地山まで6層を数えることができた。地表から地山までの深さは、20cm～82cmであった。遺物は、全く検出されなかった。

水路2トレント

水路2トレントは、遺跡の西にあり、遺跡中央より北に位置し、南北に走る導水路予定地部分である。遺構は、溝が1条検出された。溝は、本トレント北側に位置し、北東から南西の方向に本トレントを横切っている。遺物は検出されなかった。

地山は、ローム等で覆われ、地表から地山まで8層を数えることができた。地表から地山までの深さは10cm～98cmであった。

溝 上記のように本トレント北側で溝（挿図13）検出。多数の大小の川原石が検出されたが、上流から流れ込んだ水成二次堆積と推定される。上端間

180cm～250cm、深さ

12cm～30cm。ベルト

の地断を見ると上端

から川床まで8層數

えられる。溝はさら

に北東に拡張して掘

り進め、総延長8.2m

を検出した。



写真7 水路1トレント
(南から)



写真8 水路Aトレント
(西から)



写真9 水路2トレント
(北から)



写真10 水路2トレント溝 (南から)

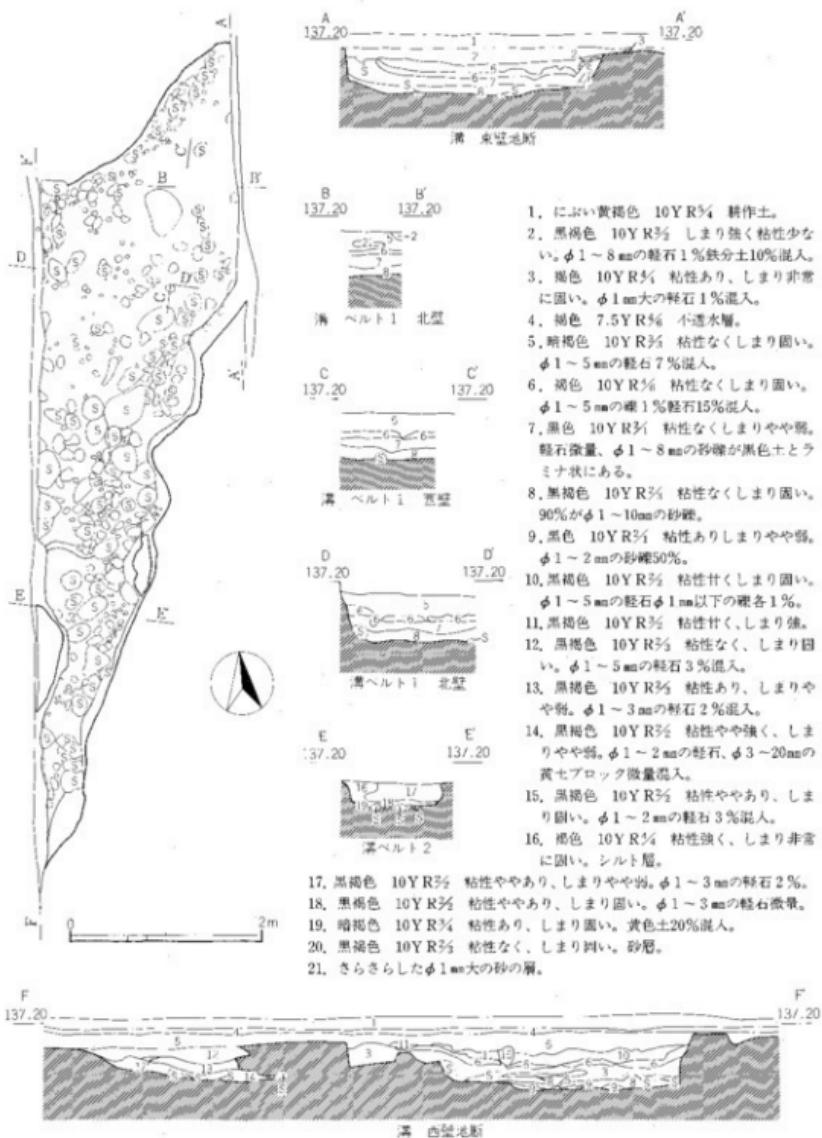


図13 水路2トレーンチ溝

E

桑畠切り土部分は、遺跡の北西にあたり、水路1トレの北端に位置する。ここは、土地改良後水田になる予定で、大幅な切り土が予定されていたため掘削したものである。表面には多量に遺物が散布していた為、遺構の存在が予想されたが、掘削してみると既に擾乱を受けており、人の手が加えられていたことが推定された。しかし覆土からは多数の遺物が検出できた。遺物は土師片が主で、600余り検出されたが、遺構は検出できなかった。地山は、ロームやその他の土が混ざっており、地表から地山まで4層が数えられ、その深さは35cm~77cmであるが、やはり擾乱の跡が見られた。

出土遺物 手捏（122、336、600）3個体、甕の口縁部（埋土）、繩文の深鉢の一部（埋土）。

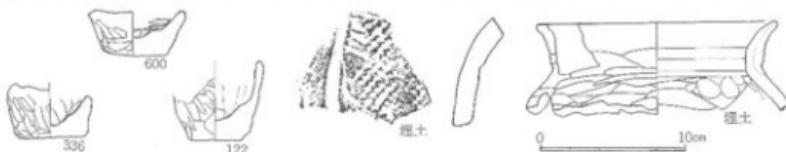


図14 E出土遺物

Aトレンチ



写真11 Aトレンチ（東から）

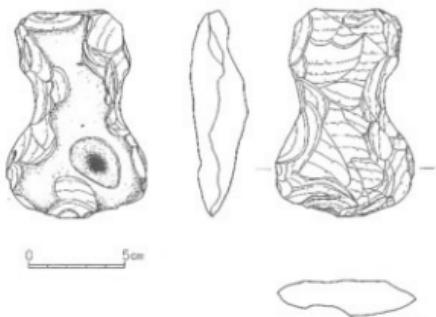


図15 Aトレンチ出土遺物

Aトレは、遺跡中央よりやや北側にあり、2トレとの交点

迄東西に走る道路、導水路予定地。B軽石下の河川跡（挿図

16）確認。他はローム等。石斧（表採）1個体検出。

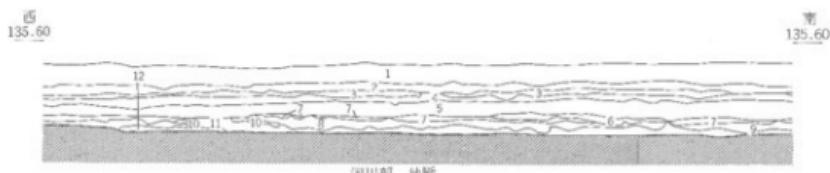


図16 Aトレンチ上層図

Bトレンチ



写真12 Bトレンチ（西から）

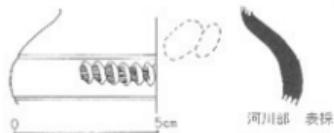
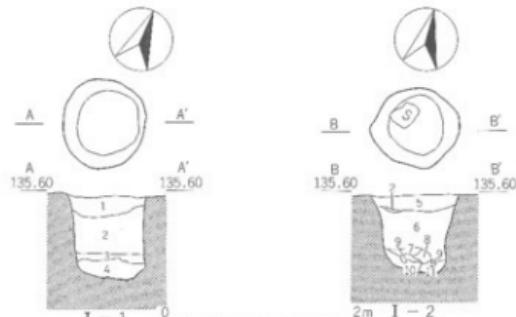


図17 Bトレンチ出土遺物



- | | | | |
|-----------------|-----------------|------------------|-----------|
| 1. 黒褐色 10YR 5/2 | 5. 黒褐色 10YR 5/2 | 9. 單褐色 10YR 5/2 | ロームの水成化。 |
| 2. 黒褐色 10YR 5/2 | 6. 黒褐色 10YR 5/2 | 10. 黑褐色 10YR 5/2 | 水成化ローム50% |
| 3. 黑褐色 10YR 5/2 | 7. 黑褐色 10YR 5/2 | 11. 黑褐色 10YR 5/2 | |
| 4. 黄褐色 10YR 5/6 | 8. 黑褐色 10YR 5/2 | | |

図18 Bトレンチ井戸



- | | |
|--|----------------------------------|
| 1. 延黄褐色 10YR 5/2 純作上。 | 5. 暗灰黄色 2.5YR 5/2 B軽石純層。 |
| 2. 棕色 7.5YR 5/2 不透水層。 | 6. 延褐色 7.5YR 5/2 Bアッシュ純層。 |
| 3. 黑褐色 10YR 5/2 粘性あまりなく、しまり固い。 | 7. 黑色 10YR 5/2 粘性あり、しまりやや固い。のろ土。 |
| 4. 黑褐色 10YR 5/2 3層よりBの混入多し。他の軽石わずかに含む。 | |

図19 Bトレンチ土層図

C トレンチ



写真13 C トレンチ（東から）

C トレンチは、遺跡の西よりにあり、中央よりやや南に位置し2トレから3トレ迄を結び、東西に走る道路予定地部分である。ここでは、溝（挿図21）1条が検出された。

地山は、河川跡にあたる部分を除くとローム等で覆われ。地山迄4層を数え、地表から地山迄の深さは、24cmから54cmをはかる。

溝 C トレンチの中央部から東にかけて検出された。地元の方々の話によれば、荻原喜代治宅の環濠に引くための水路と推定される。上端間264cm、下端間132cmで、上端から下端迄の深さは16.2cm～54.1cmをはかる。長さは約23mで、上端から川床迄の地断を見ると7層に分けられる。

出土遺物 本トレンチ及び溝から、遺物は全く検出されなかった。

D トレンチ



写真14 D トレンチ（西から）

D トレンチは、遺跡の中央より南に位置、1トレの南端と2トレ間を東西に結ぶ道路、導水路予定地。2トレ・Dトレ交点付近で、南北に流动していたと推定される河川跡（挿図23）1条は、B軽石層下で確認。上記左岸に流入と推定の溝（挿図22）1条を検出。

溝 D トレンチ中央付近から西側で検出。溝西端から東端迄約23.4m、地山から河床迄、5層を数えられる。

遺物出土状態 河床中心に溝全体に分布、1146点。

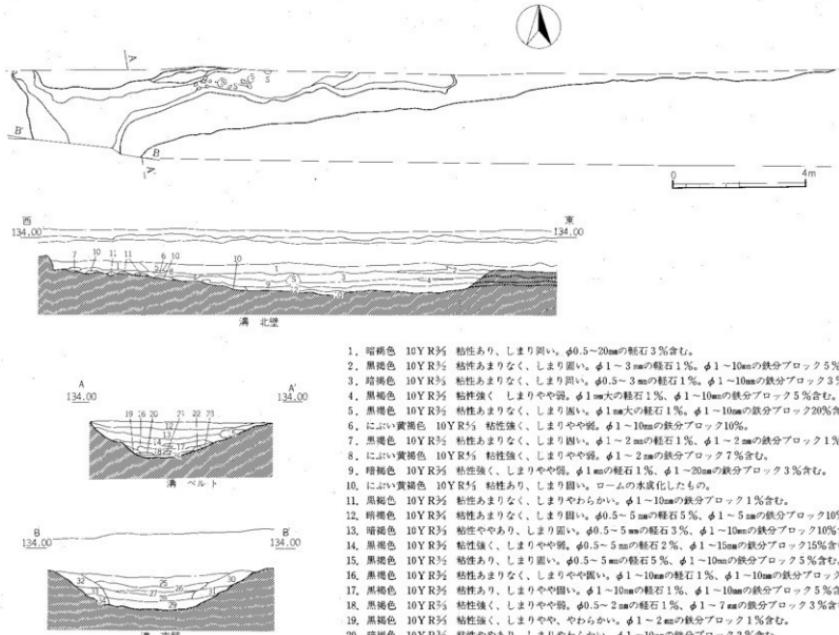
出土遺物 河床直で、凹石（324）・縄文。土師坏壘書（E13）、須恵高台付塊（E80）、蓋（E45）、盤（4E48）・奈良。灰釉陶器瓶（624）、須恵蓋（660）、土師坏壘書（534・E194）・平安等検出。時期縄文～平安。P9と付く須恵坏、H-1と付く須恵甕各1有、よって、遺物は流れ込みと推定。（挿図24～28）



写真15 D トレンチ溝（西から）

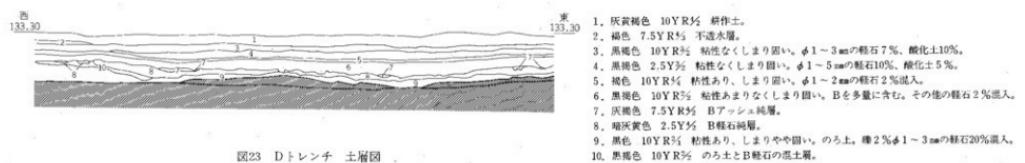
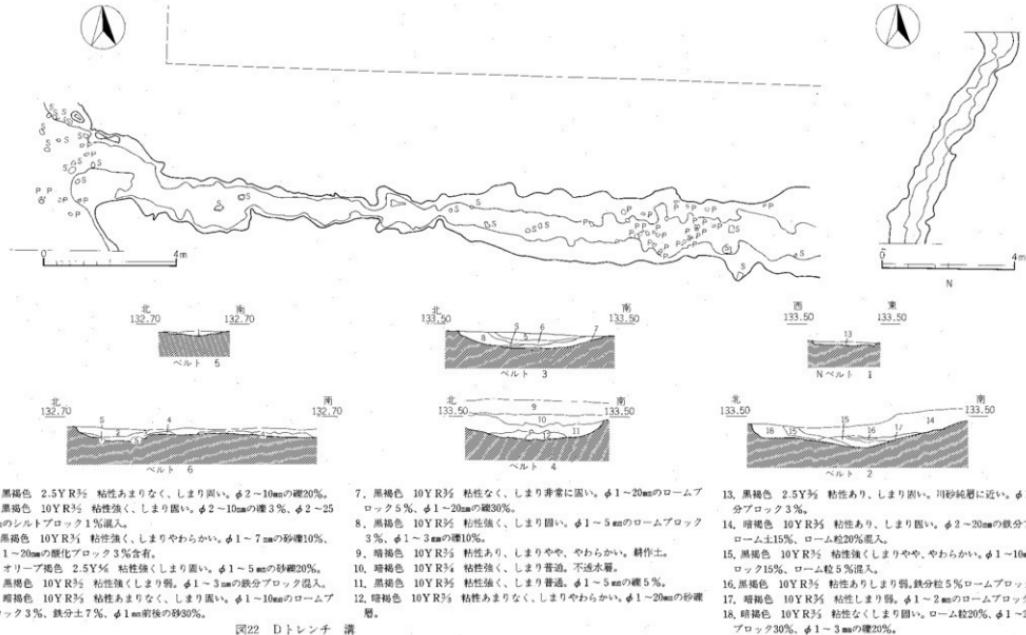


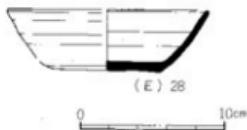
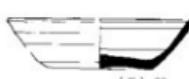
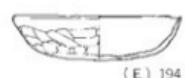
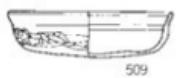
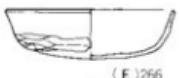
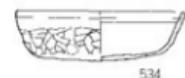
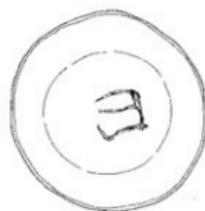
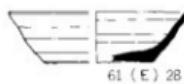
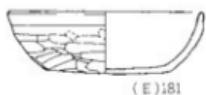
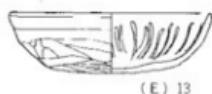
図20 D トレンチ出土遺物



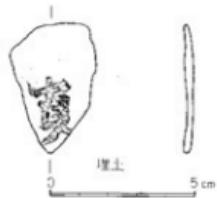
1. 布面色 10Y R 5° 粘性あり、しまり固い。φ0.5~20mmの軽石3%含む。
2. 黒褐色 10Y R 5° 粘性あまりなく、しまり固い。φ1~3mmの軽石1%。φ1~10mmの鉄分ブロック5%含む。
3. 塔褐色 10Y R 5° 粘性あまりなく、しまり固い。φ0.5~3mmの軽石1%。φ1~10mmの鉄分ブロック3%含む。
4. 黒褐色 10Y R 5° 粘性強く、しまりやや固。φ1mmの大軽石1%。φ1~10mmの鉄分ブロック5%含む。
5. 黒褐色 10Y R 5° 粘性あまりなく、しまり固い。φ1mmの大軽石1%。φ1~10mmの鉄分ブロック20%含む。
6. にじみ黄褐色 10Y R 5° 粘性強く、しまりやや固。φ1~10mmの鉄分ブロック10%。
7. 黒褐色 10Y R 5° 粘性あまりなく、しまり固い。φ1~2mmの軽石1%。φ1~2mmの鉄分ブロック1%含む。
8. にじみ黄褐色 10Y R 5° 粘性強く、しまりやや固。φ1~2mmの鉄分ブロック7%含む。
9. 塔褐色 10Y R 5° 粘性あり、しまりやや固。φ1mmの軽石1%。φ1~20mmの鉄分ブロック3%含む。
10. にじみ黄褐色 10Y R 5° 粘性あり、しまり固い。ロームの水洗化したもの。
11. 黒褐色 10Y R 5° 粘性あまりなく、しまりやわらかい。φ1~10mmの鉄分ブロック1%含む。
12. 塔褐色 10Y R 5° 粘性あまりなく、しまり固い。φ0.5~5mmの軽石5%。φ1~5mmの鉄分ブロック10%含む。
13. 塔褐色 10Y R 5° 粘性やや強く、しまり固い。φ0.5~5mmの軽石3%。φ1~10mmの鉄分ブロック10%含む。
14. 黑褐色 10Y R 5° 粘性強く、しまりやや固。φ0.5~5mmの軽石2%。φ1~15mmの鉄分ブロック15%含む。
15. 黑褐色 10Y R 5° 粘性あり、しまり固い。φ0.5~5mmの軽石5%。φ1~10mmの鉄分ブロック5%含む。
16. 黑褐色 10Y R 5° 粘性あり、しまり固い。φ1~10mmの軽石1%。φ1~10mmの鉄分ブロック7%。
17. 黑褐色 10Y R 5° 粘性あり、しまりやや固い。φ1~10mmの軽石1%。φ1~10mmの鉄分ブロック5%含む。
18. 黑褐色 10Y R 5° 粘性強く、しまりやや固。φ0.5~2mmの軽石1%。φ1~7mmの鉄分ブロック3%含む。
19. 黑褐色 10Y R 5° 粘性強く、しまりややや、やわらかい。φ1~2mmの鉄分ブロック1%含む。
20. 塔褐色 10Y R 5° 粘性ややあり、しまりやわらかい。φ1~10mmの鉄分ブロック5%含む。
21. 黑褐色 7.5Y R 5° 粘性強く、しまり固い。φ1mmの大軽石1%。酸化土10%。
22. 明褐色 7.5Y R 5° 粘性強く、しまり固い。ローム50%。
23. 塔褐色 10Y R 5° 粘性強く、しまりやや。φ1~15mmの鉄分ブロック5%含む。
24. 塔褐色 10Y R 5° 粘性強く、しまりやや、やわらかい。φ1~10mmの鉄分ブロック3%含む。
25. 塔褐色 10Y R 5° 粘性強く、しまりやや。φ1~5mmの鉄分ブロック3%。
26. 塔褐色 10Y R 5° 粘性強く、しまり固い。φ1mmの大軽石1%。φ1~5mmの鉄分ブロック5%含む。
27. 黑褐色 2.5Y R 5° 粘性なく、しまりやわらかい。φ1mmの大軽石1%。φ1~5mmの鉄分ブロック5%含む。
28. 黑褐色 10Y R 5° 粘性なく、しまりやわらかい。φ1mmの大軽石1%。φ1~10mmの鉄分ブロック5%含む。
29. 黑褐色 10Y R 5° 粘性なく、しまりやわらかい。φ1mmの大軽石1%。φ1~10mmの鉄分ブロック5%含む。
30. 塔褐色 10Y R 5° 粘性強く、しまりやや固。φ0.5~4mmの軽石2%。φ1~15mmの鉄分ブロック5%含む。
31. 黑褐色 10Y R 5° 粘性強く、しまりやや固。φ0.5~3mmの軽石1%。φ1~10mmの鉄分ブロック3%含む。
32. 塔褐色 10Y R 5° 粘性強く、しまり固。φ0.5~2mmの軽石3%。φ1~10mmの鉄分ブロック7%含む。
33. 黑褐色 10Y R 5° 粘性強く、しまり固。φ0.5~5mmの軽石1%。φ1~5mmの鉄分ブロック1%含む。
34. 塔褐色 10Y R 5° 粘性強く、しまりやわらかい。φ1~10mmの鉄分ブロック1%含む。

図21 Cトレント溝





0 10cm



5 cm

図24 D-W出土遺物-1

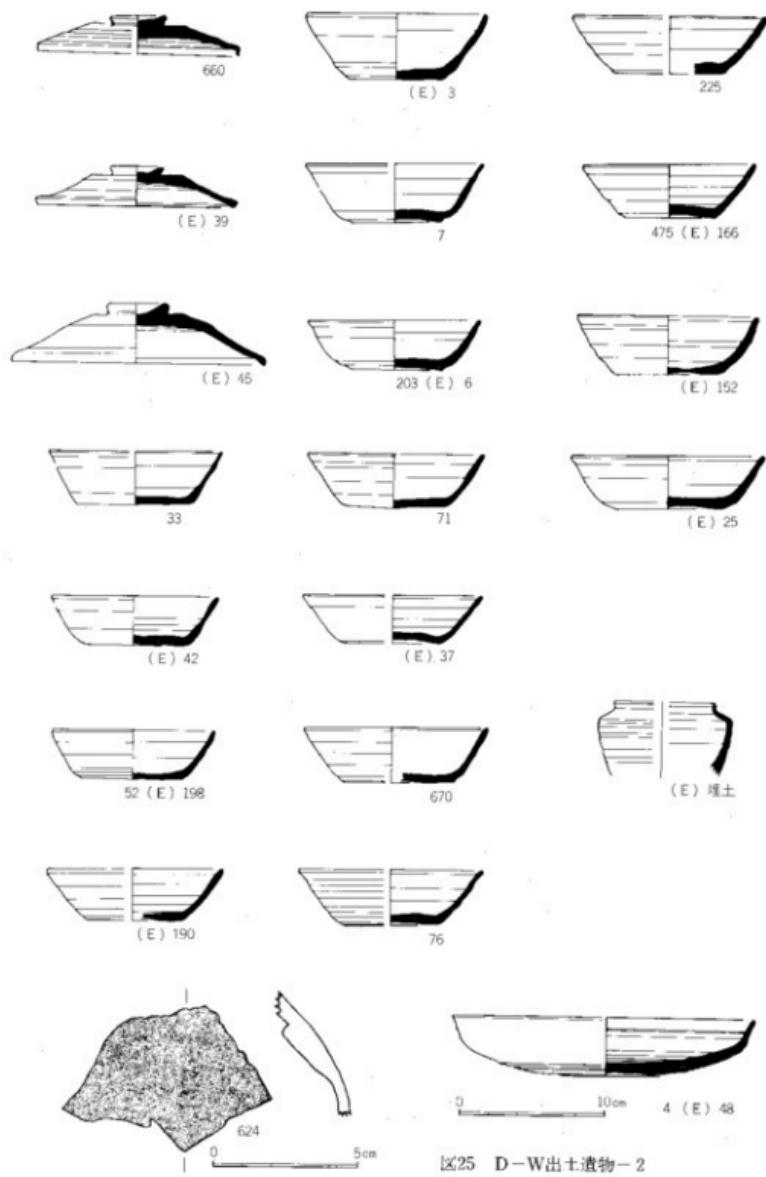


図25 D-W出土遺物-2

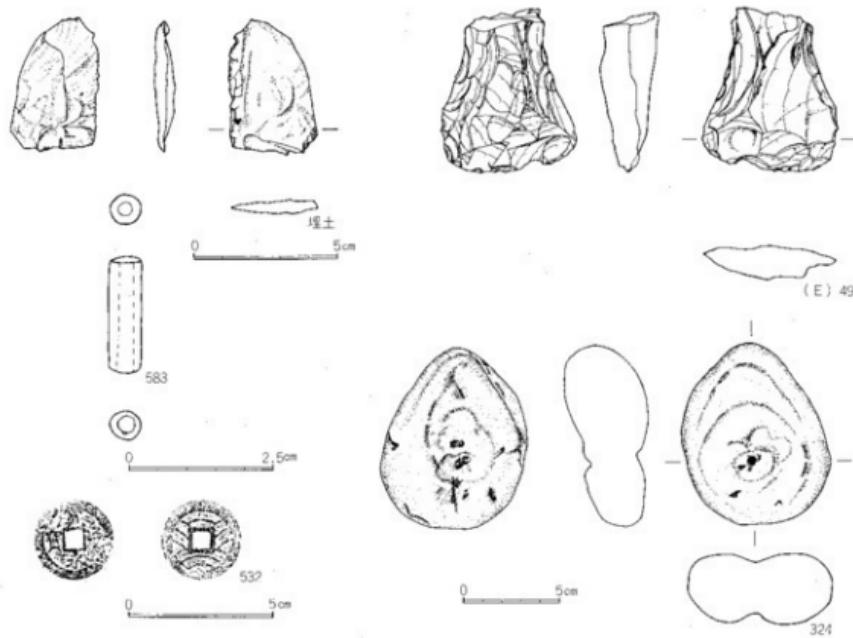


図26 D-W出土遺物-3

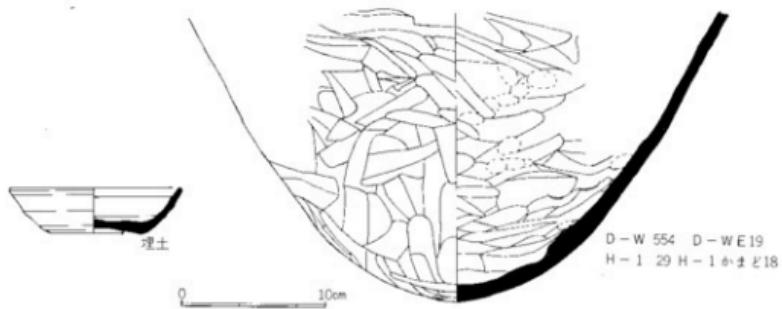


図27 P-9、D-W出土遺物

図28 D-W H-1出土遺物

Dトレンチ拡張部



写真16 Dトレンチ拡張部(北東から)

柱建物跡1基を含む)土坑6基であった。地山はローム等により覆われ、地表から地山までは4層が数えられる。その深さは26cm~74cmである。

土坑(D₁~D₆) Dトレンチ拡張部中央から北にかけて位置する。D₁、D₂はFP・ロームを含む層、D₃はFP・礫含有層、D₄はFP含有層、D₅はローム含有層、D₆は石粒含有層で覆われている。

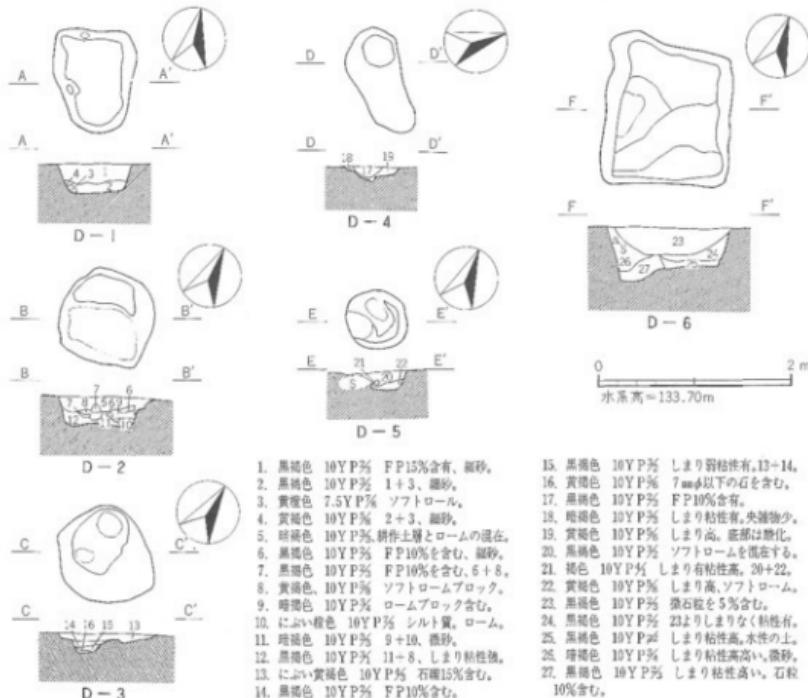
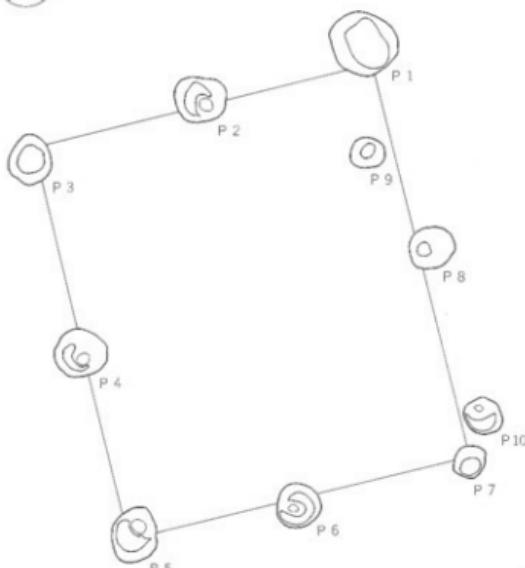


図30 土坑(1号~6号)

ピット群 (P₁～P₂₀)



写真17 1号掘立柱建物跡（北から）



0 2 m

図31 1号掘立柱建物跡

ピット群はDトレ拡張部西から北に広がる。そのうちP₁～P₄はB-1をつくる。P₉～P₂₀は直径28cm～112cm、深さ8cm～36cmで覆土は2層～9層に分けられ、FP含有層とローム含有層から成っている。出土遺物 P₉の須恵坏はD-Wの出土遺物と接合（挿図20）P₁₄から黒曜石、P₁₅から長石の剥片が出土。（写真18、19）

第1号掘立柱建物 Dトレ拡張部の西よりのピット

群の中にあり、南北に長い長方形で、8本柱である。主軸はN-13°-Wで長軸4.20m、短軸3.66mである。覆土はピットの上端から底部まで4層～8層数えられ、FP含有層とローム含有層からなる。遺物なし。（図31）



写真18 P-14黒曜石



写真19 P-15長石(?)

第1号住居址

遺構 D トレ拡張部東南に位置する竪穴住居址である。主軸方位はN-157.5°-Eで、北壁中央でH-2号住居址を切る。柱穴4、貯蔵穴1を検出。周溝なし。土層は基盤的に3層に分けられ、かま掘りによる耕作土層F P含有層ローム含有層である。床面は凹凸の差が18cmある。張り床有。かまと 東壁5:3の割合で南よりの位置に造られている。主軸方位はN-71.5°-Eを指し、6割強を住居外に造り出す。両袖とも袖石が置かれ、支脚もほぼ使用状況のままで検出。

遺物出土状態 かまと付近を中心に、住居址全体に分布。

出土遺物 遺物総数は644点と多く、壺(385)、高台付鉢(245、339)、蓋(514)、黒曜石剝片(71)、紡錘車(506)、寛永通宝(195)、床下から砥石出土。遺物から奈良時代住居址と判定。(挿図34)



図32 1号住居址かまと

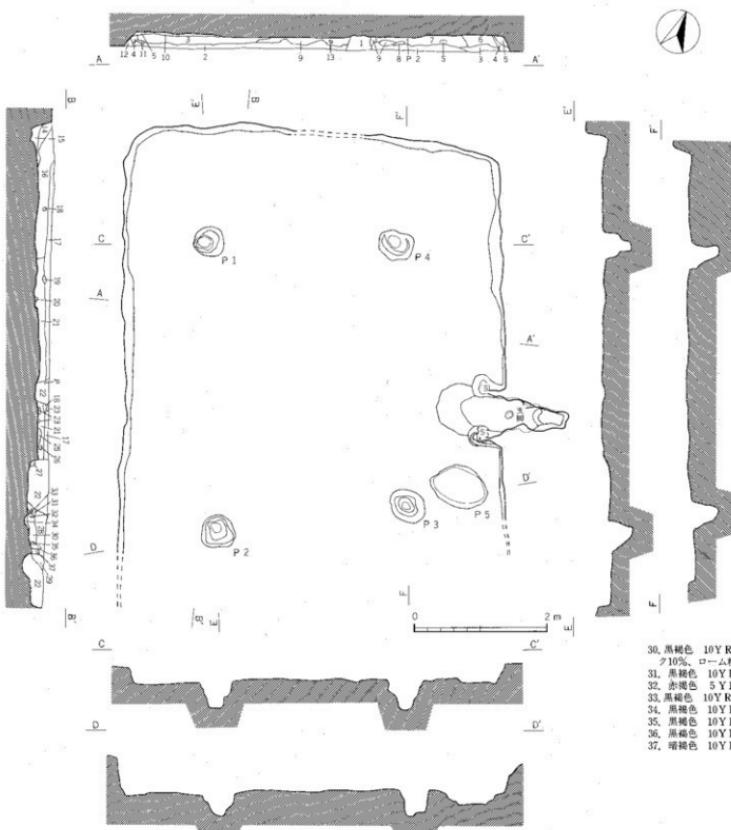


図33 1号住居址

1. 黒褐色 7.5YR 5/6 しまり弱いが粘性あり。1cmφのロームブロック点在。
かさ高さり。
2. 黒褐色 7.5YR 5/6 しまり弱いが粘性あり。5~6mmのFP 30%含有。
3. 黒褐色 10YR 5/6 しまり弱い。7~8mmのFP 20%含有。焼土ロームブロック点在。
4. 黑褐色 10YR 5/6 しまり粘性あり、夾雜物僅少。
5. 黑褐色 10YR 5/6 しまり粘性高い、夾雜物僅少。ソフトロームとの混在。
6. 黑褐色 10YR 5/6 しまり粘性あり。2mmφのFP 7%含有。焼土ロームブロック点在。
7. 黑褐色 10YR 5/6 しまり弱いが粘性あり。5mmφのFP、石粒を20%含む。地土上部かに含む。
8. 黑褐色 10YR 5/6 しまり弱い。2mmφのFP 10%、焼土、土、石を含む。
9. 黑褐色 7.5YR 5/6 しまり粘性あり。8mmφのFP 15%、焼土のみ含む。
10. 黑褐色 10YR 5/6 しまり粘性高い。焼土、炭とソフトロームの混在。
11. 黑褐色 10YR 5/6 4とソフトロームの混在する。
12. 明黄褐色 10YR 5/6 しまり弱い粘性高い。ソフトローム。
13. 黑褐色 7.5YR 5/6 しまり粘性高い。5mmφのFP 30%含む。
14. 黑褐色 10YR 5/6 2~3mmφのFP 15%含有。しまり粘性あり。
15. 黑褐色 10YR 5/6 しまり粘性高い。3mmφのFP 10%、焼土、ロームブロック点在。
16. 増褐色 10YR 5/6 しまり弱い。8mmφ以下のFP 30%含有。ローム小塊、焼土を僅に含む。
17. 黑褐色 10YR 5/6 しまり粘性弱い。2~3mmφのFP 15%含む。
18. 黑褐色 10YR 5/6 しまり弱いが粘性高い。ソフトロームブロック。
19. 黑褐色 7.5YR 5/6 しまり粘性あり。8mmφのFP 30%含む。
20. 黑褐色 10YR 5/6 しまり粘性高い。焼土、炭とソフトロームの混在。
21. 黑褐色 10YR 5/6 しまり粘性高い。5mmφのFP 20%、焼土、ロームブロック点在。
22. 増褐色 10YR 5/6 粘性あまりなく、しまり強い。φ1~10mmの軽石5%ローム2%ロームブロック(φ1~10mm)。
23. 黑褐色 10YR 5/6 粘性強く、しまり弱い。ローム絆多量に含む。
24. 黑褐色 10YR 5/6 粘性強く、しまり弱い。φ1~10mmの軽石20%。
25. 黑褐色 10YR 5/6 粘性強く、しまりやわらかい。ローム絆5%。
26. 黑褐色 10YR 5/6 粘性あまりなく、しまりやや、やわらかい。φ1~5mmのロームブロック2%。
27. 黑褐色 10YR 5/6 粘性強く、しまり弱い。φ1~5mmの軽石2%ローム土多量。
28. 黑褐色 10YR 5/6 粘性あり、しまりやや、やわらかい。φ1~10mmの軽石10%、ローム絆5%、φ1~5mmのロームブロック2%。
29. 黑褐色 10YR 5/6 粘性つう、しまりやや、やわらかい。ローム絆5%軽石5%、ローム土5%。
30. 黑褐色 10YR 5/6 粘性強く、しまり弱い。φ1~3mmの軽石3%、ローム絆5%、φ1~10mmのロームブロック1%、φ1~7mmのロームブロック10%、ローム土5%、φ1~3mmの軽石3%。
31. 黑褐色 10YR 5/6 粘性強く、しまり弱い。φ1~10mmのロームブロック多量。
32. 赤褐色 5YR 5/6 粘性なく、しまり弱い。φ1~10mmの軽石5%。
33. 黑褐色 10YR 5/6 粘性あり、しまりやや、やわらかい。ローム絆20%、φ1~10mmの軽石20%。
34. 黑褐色 10YR 5/6 粘性強く、しまりやや、やわらかい。ローム40%、ローム絆5%。
35. 黑褐色 10YR 5/6 粘性強く、しまりやわらかい。ローム土20%。
36. 黑褐色 10YR 5/6 しまり弱いが粘性高い。ローム5%、φ1~2mmの軽石1%含有。
37. 増褐色 10YR 5/6 しまり粘性あり。ローム30%含有。

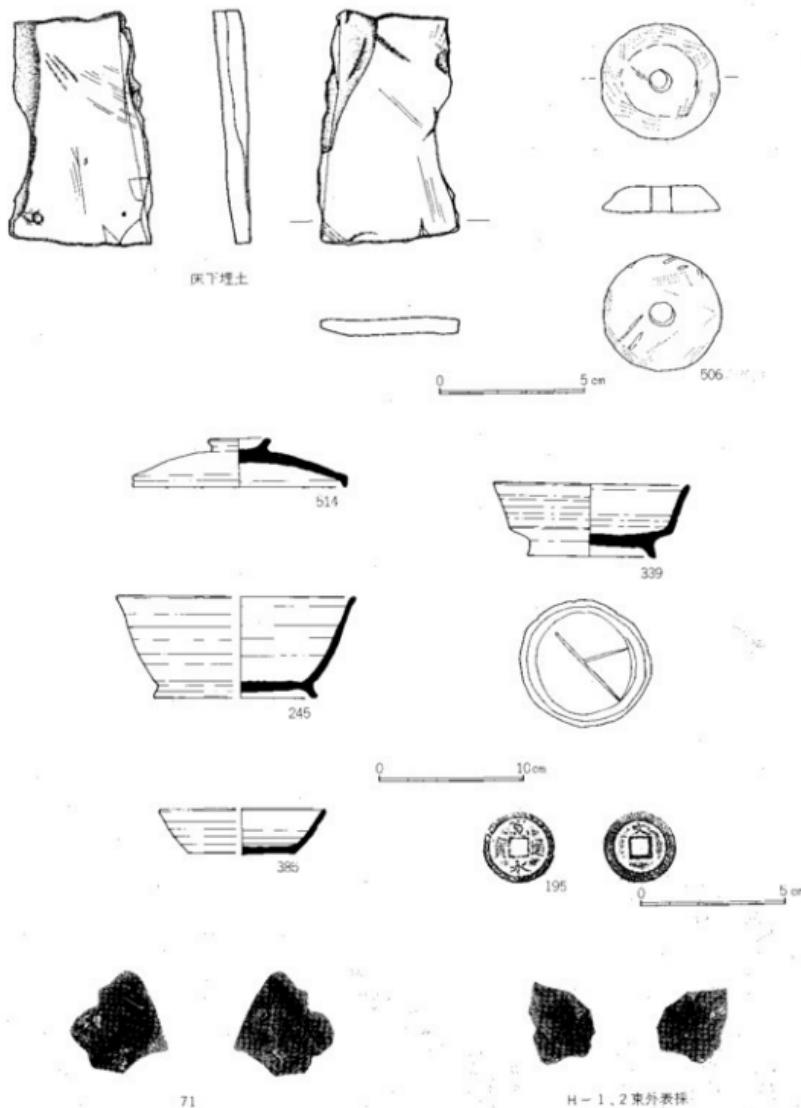
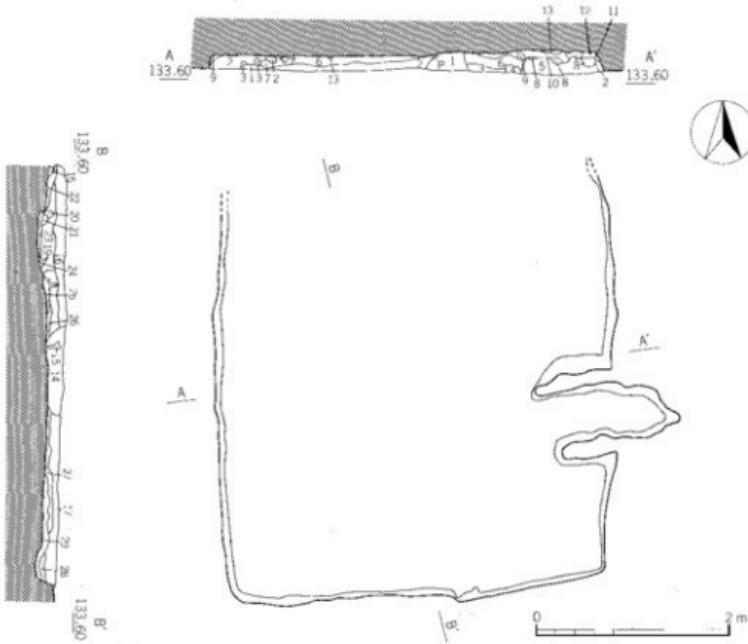


图34 1号住居址出土遗物

第2号住居址

Dトレンチ拡張部東南に位置する堅穴住居址。平面の形状隅丸方形を呈し、かまどを東壁ほぼ中央に持つ。南壁東側で奈良期H-1号住居址に切られ、推定だが、北壁と西壁でH-3号住居址と重なる。推定の長軸4.40m短軸4.18m面積17.8m²、柱穴は確認されず。周溝、貯蔵穴なし。主軸方位N-180°-E、土層は基本的に5層。かま掘り後耕作土混入層、FP含層、ローム含層、石粒含有層、FPとローム混入層。確認壁高20.0cm、壁の平均傾斜角29°。床面凹凸差25.0cmある。



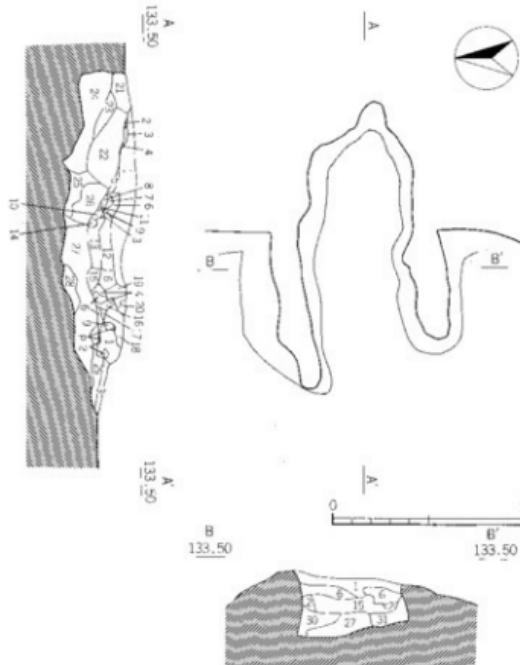
1. 黒褐色 7.5YR 3/6 かま掘り しまり弱い
が粘性有。ロームブロック点在。
2. 黒褐色 7.5YR 3/6 ソフトローム蘆在。
3. 黒褐色 7.5YR 3/6 FP 30%含む。
4. 黑褐色 7.5YR 3/6 FP 15%含む。
5. 粘褐色 10YR 3/6 石礫15%含む。
6. 黑褐色 7.5YR 3/6 FP 15%含む。部分的に
ロームブロックを含む。しまり弱、粘性有。
7. 黒色 10YR 3/6 FP 3%含む。
8. にじい黄褐色 ロームの重土化したもの。
9. 黄褐色 7.5YR 3/6 ソフトローム層。
10. 黒色 7.5YR 3/6 FP 15%含む。
11. 黑褐色 10YR 3/6 石粒15%含む。
12. 黑褐色 10YR 3/6 地土重膚む。
13. 棕色 10YR 3/6 ソフトロームと2の混在。
14. 黑褐色 10YR 3/6 FP 30% ロームブ
ロック点在。
15. 棕色 10YR 3/6 ソフトローム酸化、夾雜
物なし。
16. 黄褐色 7.5YR 3/6 FP 30%含む。ローム
ブロック点在。しまり、粘性有り。
17. 黑褐色 10YR 3/6 FP 砂を2%含む。し
まり、粘性の弱い耕作上。
18. 黑褐色 10YR 3/6 FP 10%含む。
19. 黑褐色 7.5YR 3/6 FPの石粒20%含む。
20. 喙褐色 10YR 3/6 21+19。
21. 明黄褐色 10YR 3/6 しまり、粘性高い。
ロームブロック。
22. 黑褐色 10YR 3/6 FP 20%含む。
23. 黄褐色 10YR 3/6 しまり、粘性高い。ロー
ム層。
24. にじい黄褐色 10YR 3/6 しまり、粘性高
い。ローム層。
25. 棕色 7.5YR 3/6 ソフトローム酸化。
26. 黑褐色 10YR 3/6 しまり弱、粘性有り。
FP 10%純上。ロームブロックを含む。
27. 黑褐色 10YR 3/6 しまり、粘性有り。F
P 10%含む。
28. 黑色 10YR 3/6 しまり、粘性高い。FP
10%含む。ロームブロック点在。
29. 黑色 10YR 3/6 しまり、粘性高い。FP
20%含む。ロームブロック点在。

図35 2号住居址

かまと 東壁2:2で中央に造られ、主軸方位N-87.5°E、両軸ともしっかりした形で検出。全長の4割を住居外に造出し、煙導部残存す。全体の残存状態はほぼ良好。全長144cm、全幅115cm。支脚は検出されず。また、粘土、構築材用の石等は検出されなかった。

遺物出土状態 かまと付近に遺物の集中が見られた。

出土遺物 遺物総数は11点と非常に少なかった。また、実測可能な遺物もなかった。時期は、奈良時代に属するH-1に切られていることや、遺構のようすからして、H-1よりも30年前後古いと推定される。



16. にふい褐色 7.5Y R 4% しまり、粘性の高い粘土。
17. にふい褐色 7.5Y R 4% 16+粘土50%混在。
18. にふい褐色 7.5Y R 4% しまり粘性やや有。6+4。
19. 褐色 7.5Y R 3% しまり粘性有。石粉砂塵少。燒土50%含む。
20. 黒褐色 10Y R 3% しまり剥離性なし。7mm FP 15%含む。
21. 黒褐色 10Y R 3% 粘性有。しまり弱。燒土粒7%ローム粒10%。

22. 赤褐色 2.5Y R 3% 粘性なし。しまり強。燒土粒25%ローム10%。
23. 暗褐色 10Y R 3% 粘性有。しまり弱。燒土8%ローム10%。
24. 褐色 10Y R 3% 粘性有。しまり弱。燒土2%ローム15%炭化物含。
25. 褐色 10Y R 3% 粘性強。しまり弱。60%がローム。

図36 2号住居址かまと

1. 黒褐色 10Y R 3% 5mmのローム粒、燒土粒含。しまり有粘性弱。
2. 赤褐色 2.5Y R 3% 固く焼け、しまった焼土。
3. 黒褐色 10Y R 3% しまり粘性有。微石粒をわずかに含む。
4. にふい赤褐色 2.5Y R 3% しまり有。粘性強。2+3。
5. 黒褐色 10Y R 3% しまり粘性有。燒土・ロームブロック含む。
6. にふい黄褐色 10Y R 3% しまり粘性の強い粘土。7mm焼土ブロック点在。
7. 黒褐色 10Y R 3% しまり粘性強。6mmの石粒含む。
8. 黑褐色 10Y R 3% しまり粘性強。砂質土50%。燒土ローム混在。
9. にふい黄褐色 10Y R 3% 粘性有。しまりなし。FP 10%含。さらさらした土。
10. 黑褐色 7.5Y R 3% しまり粘性ともに高い。粘質土。
11. 灰黄褐色 10Y R 3% 燃土の混在した灰層。
12. 黑褐色 7.5Y R 3% しまり粘性有。燒土をわずかに含む。
13. 黑褐色 7.5Y R 3% しまり粘性有。コロイ土状結合。
14. 明黄褐色 10Y R 3% しまり弱粘性強。ソフトロームブロック。
15. 黑褐色 7.5Y R 1.7/1 しまり弱粘性高。炭化物・灰 majiri。

26. 棕色 10Y R 3% 粘性有。ローム10%含。
27. 黑褐色 10Y R 3% 粘性強。しまり弱。ローム20%。焼土1%。炭化物1%。
28. 棕色 10Y R 3% 粘性強。しまり弱。ローム40%焼土粒1%含む。
29. 棕色 10Y R 3% 粘性しまり有。焼土2%炭化物1%炭多量ローム5%。
30. 暗褐色 10Y R 3% 粘性有ローム20%。
31. 黄褐色 10Y R 3% 粘性有。しまり弱。炭化物1%ローム20%含む。

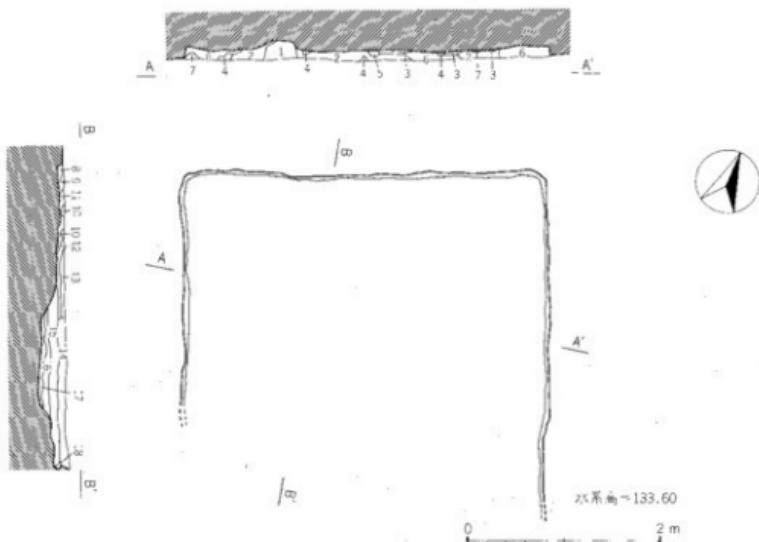
第3号住居址

遺構 D トレ拡張部東南に位置する竪穴住居址である。平面の形状は隅丸長方形を呈す。そして推定だが、南壁と西壁でH-2号住居址と切り合い関係。寸法は、長軸が4.00m、短軸が推定で3.18mをはかり、面積は推定で12.1m²である。柱穴は確認されず、周溝・貯蔵穴なし。主軸方位はN-63°-E。土層は基本的に5層。耕作土、かま掘り後混入した耕作土、F Pを含む層、ロームを含む層、F Pとロームを含む層である。確認壁高16cm。壁の平均傾斜角は23°をはかり、非常にゆるやかに立ち上がる。床面の凹凸の差は9cmである。

かまと かまと・炉・焼土痕等は確認されず。

遺物出土状態 H-2号住居址と重なる南壁中央付近を中心に遺物が分布。

出土遺物 遺物総数は17点。実測可能な遺物はなかった。時代不明。



- | | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 黒褐色 7.5YR 5/6 ロームブロック存在。かま掘り。 | 10. 黒色 10YR 5/6 しまり粘性高。夾雜物わずか。 |
| 2. 黒褐色 7.5YR 5/6 しまり粘性有。ソフトローム混在。 | 11. 暗色 7.5YR 5/6 しまり粘性高。ソフトローム酸化。 |
| 3. 緑色 10YR 5/6 しまり粘性有。ソフトロームと2の混在。 | 12. 黒褐色 10YR 5/6 しまり弱粘性高。石粒含有。F P30%。 |
| 4. 黄褐色 10YR 5/6 しまり粘性高いソフトローム層。 | 13. 琉璃色 10YR 4/6 しまり粘性弱い耕作土。ソフトローム混。 |
| 5. 緑色 10YR 5/6 しまり粘性の高いソフトローム+2。 | 14. 黒褐色 10YR 5/6 しまり粘性弱い耕作土。 |
| 6. 黒色 7.5YR 5/6 粘性有。F P15%。ロームブロック含む。 | 15. 黒褐色 10YR 5/6 しまり粘性弱い耕作土。F P肆20%。 |
| 7. 黑褐色 7.5YR 5/6 しまり弱粘性高。F P30%含む。 | 16. 黑褐色 10YR 5/6 しまり粘性有。F P10%含む。 |
| 8. 黑褐色 7.5YR 5/6 しまり弱粘性高。夾雜物少い耕作土か。 | 17. 明褐色 7.5YR 5/6 しまり粘性高いソフトローム層。 |
| 9. 黑褐色 7.5YR 5/6 しまり弱粘性高。8+ソフトローム。 | 18. 褐色 10YR 5/6 夾雜物なし。ソフトローム酸化+14。 |

図37 3号住居址

V まとめ

遺跡の地形について

本遺跡地は、南北に流れる2本の河川が中央で合流し、1本となって南下している。この河はさらに南に下り、昭和59年度調査の小神明遺跡群III（谷向遺跡）の現河川へと伸びている。そして、本遺跡地西に南北に流れる現河川があり、この河川も南下し、谷向遺跡の現河川へとつながる。現地形を見ると、河川が流れている付近が低く、遺跡北の西・中央・東が微高地となっている。そして、遺跡北東と北西に桑畠があり、その他は水田となっている。遺跡北東の桑畠では、遺物の少量散布が見られ、遺跡北西の桑畠では遺物の濃密散布が見られた。遺跡北西の桑畠（E）では遺構の存在が予想され、さらに大幅な切り土が計画されていたため調査したところ、遺物は多数出土したが、既に搅乱を受けており、遺構は検出されなかった。水田には遺物の散布が殆んど見られず、谷向遺跡で大きな河川跡が検出されていたため、河川跡の存在は予想したが、住居址の存在については不確であった。各トレンチに河川跡が確認或は検出されたが、微高地では住居址が検出された。また、今回出土した遺物を見ると、縄文時代から近世まで多数あり、ほかの住居址の存在が推定された。従って、この地は、小丘陵と小河川から成り、先人住居の好適地と推定される。しかし、各トレンチの土層を見ると、ローム段丘面や搅乱が見られたことから、戦中からずっと続いたとみなされる人為削平を受けており、遺構の存在が懸念される。

遺構について

本遺跡地内の遺構は、河川跡、溝、土坑、ピット、井戸、暗渠、掘立柱建物跡、竪穴住居址が確認或は検出された。

溝は、3・水路2・C・Dの各トレンチで検出された。水路2トレンチからは多数の川原石が検出されたば、これは、水成二次堆積で、上流からの流れ込みと推定した。Cトレンチの溝は、現荻原喜代治宅の環濠（現在は埋められて畑等になっている。）に水を引くための水路であると推定した。これは、地元の方々の話と、遺構のようすから判断した。Dトレンチの溝は、多数の遺物が検出されたが、特に、河床直で縄文時代から平安時代までの遺物が検出され、従って、その間、この溝は生きていたと推定した。

竪穴住居址については、H-1は、床直の出土遺物からして奈良時代と推定し、H-2については、H-1に切られていることや、遺構のようすからして、H-1より30年前後古いと推定した。H-3は、遺物もなく、H-2との切り合い関係も不明なため、時期は不明である。

河川跡も多数確認され、それらは、方向からして、南下し、小神明遺跡群III（谷向遺跡）で確認或は検出された河川跡に統くのではないかと推定される。

出土遺物について

本遺跡からは、E（遺跡北西の桑畠切り土部分）から土師片を中心に、縄文土器片等600点余り出土したが、縄文土器片や手捏、土師甕口縁を除いたほかは、実測可能な遺物がなかった。また、

H-1からは、78点が出土した。奈良時代に属する須恵高台付壺や須恵壺等が床直で出土し、床直ではないが黒曜石の剥片が1点出土した。D-Wからは、総数1100点余りの遺物が出土した。円石等の縄文時代の遺物、須恵の蓋・壺・盤・高台付壺、土師壺（墨書）等の奈良時代に属する遺物、そして、須恵の壺・蓋、土師壺（墨書）、灰釉陶器（瓶）等の平安時代に属する遺物が検出された。また、P9と接合された須恵壺や、H-1と接合された須恵甕もあり、よって、D-Wの遺物は、上流或は、付近からの流れ込みと推定した。

H-1とD-Wから、寛永通宝が各1点検出された。

また、2トレンチからは、縄文時代の無茎石錐が検出され、さらに、P14、H-1、H-1・2東外から黒曜石の剥片が各1点検出された。黒曜石の存在から、縄文時代にこの地の先人が交易をしていたことが推定される。

2トレンチの北からは、大小の川原石を検出した。これは、上流からの流れ込みによる水成二次堆積と推定される。また、Bトレンチ河川跡からは、駆の体部を検出した。よって、付近或は上流に古墳の存在が予想される。

以上のように、遺物は、弥生時代を除き、縄文時代から、古墳・奈良・平安を経て、近世まで及んでいる。このことは、この地の付近或は、上流にそれらの遺物を伴う遺構の存在が予想されるが、本遺跡の場合、「遺跡の地形について」で述べたが、既に人为的削平を受けており、遺構も削平を受けている可能性が高いが、本遺跡のすぐ北で行なわれた昭和57年度調査の小神明遺跡群のA・B区からは、縄文・古墳・奈良・平安各時代の竪穴住居址が検出されていることから、本遺跡地内にも、それら各時代の住居址の存在が予想される。

これまでの小神明遺跡発掘調査

小神明遺跡群（A・B区、C・D区）昭和57年度 昭和57年11月1日～昭和58年1月22日

小神明遺跡群II（倉本・九料・西田・大明神）昭和58年度・昭和58年5月23日～8月30日
昭和58年11月16日～12月12日

小神明遺跡群III（谷向）昭和59年度 昭和59年7月5日～9月14日

小神明遺跡群IV（湯気・九料）昭和60年度 昭和60年6月6日～12月6日
(九料遺跡南側) 昭和60年度 昭和61年1月13日～2月26日

小神明遺跡群V 昭和61年度 昭和61年6月30日～10月4日

（注）九料遺跡南側の発掘成果は、小神明遺跡群IVとVにまたがり掲載。

参考文献

「古錢と紙幣」 次部倉吉 1984

「芳賀東部団地遺跡群 第1巻」 前橋市教育委員会 1984

「陶邑古窯址群 I」 平安学園考古学クラブ讲辯昭二 1966

「B4株木遺跡」 藤岡市建設部・教育委員会 1984

「北原遺跡〈本文編〉」 群馬県教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団 1986



写真20 遺跡全景（北から）

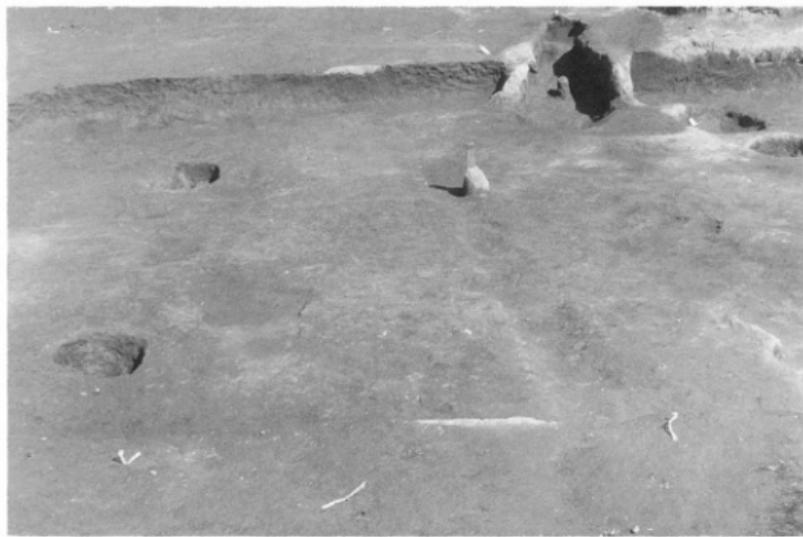


写真21 1号住居址（西から）



写真22 1号住居址かまど（西から）



写真23 1号住居址No245出土状況（南から）

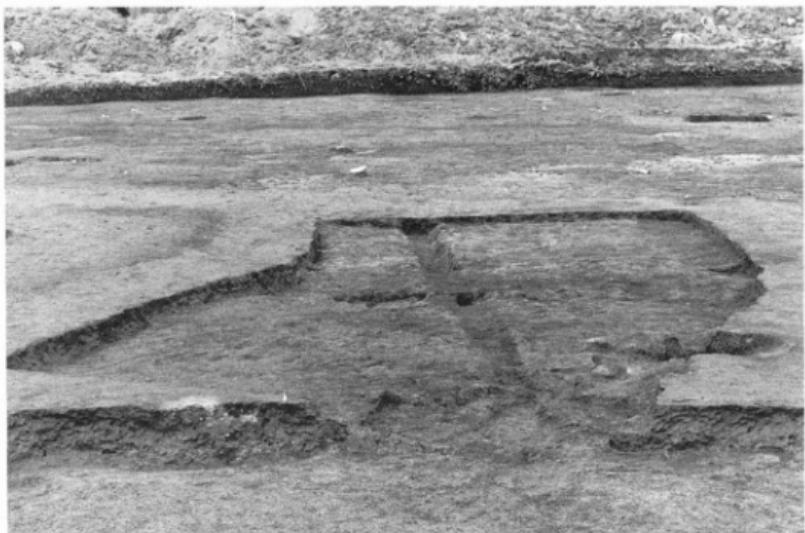


写真24 2・3号住居址（南から）



写真25 2号住居址かまど（西から）



写真26 Dトレンチ溝 遺物出土状況（西から）



写真27 記念写真

九料遺跡(南側)

〈昭和61年1月～2月調査〉

1987

前橋市教育委員会

I 遺跡の概要

本報告は昭和61年1月13日より同年2月26日まで実施した発掘調査の概要を記すものである。

本遺跡はすでに2回、昭和58年と昭和60年に発掘が行なわれており、今回の調査区は前回まで発掘が実施された調査区の南側に接している。

本遺跡は赤城山南麓に位置し、前橋市勝沢町に所在する。周辺はゆるやかな南斜面となっており、この斜面は南流する中小河川の開析により、南北に細長く伸びた舌状台地が平行して幾重にも形成されている。本遺跡はこれら舌状台地のひとつに立地している。この台地は幅が20m程度で、東西両側に浅い谷をもつていて、また、当台地は今回の調査区南端で急に落ち込み、先端部となっている。

検出された遺構と遺物は縄文時代と古墳時代後期で、特に古墳時代後期が主体を成している。

縄文時代は前期諸磧A式土器を伴う住居址1軒、中期加曾利E式土器を伴う住居址1軒、詳細な時期は不明だが集石1基が検出された。遺物は多数の土器と石器が出土しており、この内土器は諸磧式を主体としている。遺構・遺物の分布は調査区全域に渡り散在している。

古墳時代後期の遺構は住居址24軒、土壙29基である。住居址は全てかまどを有す鬼高窓の所産である。形態は全て方形を呈し、貯蔵穴状の土壙を有している。柱穴は大部分の住居址で確認されたが、一部に存在し無い例も認められる。主軸方向は大きく3方向に分けられ、東～北東が14軒、北～北西2軒、西～南西が4軒、不明が4軒である。覆土中には上層にFA層が認められた住居が多数存在する。分布状況は北部と南部の2群に分けられるような傾向が認められ、中央部に住居址の分布がやや希薄な地域が存在する。この地域は地形上の傾斜変換点となっている。土壙は大きく3つの群を形成しており、住居址の分布とはほぼ一致する。形状は長方形もしくは円形を呈し、断面形が鍋底状を呈す。住居址との関係はH-80住居址及びH-72住所址の覆土を掘り込み構築される例とH-76住居址により切られる例がある。遺物は皆無に近く、一部の土壙で土師器片が検出されたにすぎない。また、土壙の一部には削平を受け消失してしまった住居址の貯蔵穴状土壙の可能性をもつ例もある。

遺物は土器が主体を占めており、この他に須恵器、石製品が存在する。土師器は甕、瓶類が多く、壺類が少ない。また、壺は内斜口縁をもつ例と須恵器蓋の模倣形の例がある。須恵器は少量で、甕類の破片が出土している。石製品は滑石製模造品、管玉、紡錘車が存在する。滑石製模造は劍形および鏡形が各1点出土している。管玉は滑石製1点、緑色凝灰岩製1点が出土している。紡錘車は滑石製で、中には刻線により雑な文様が施文されている例もある。

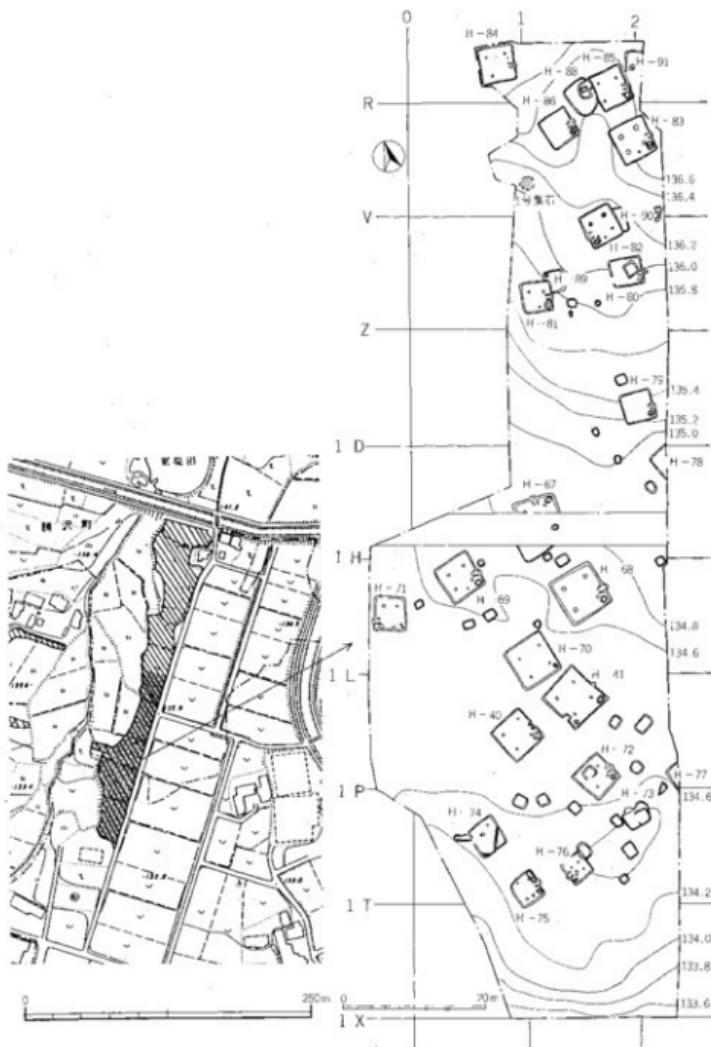


図1 九料遺跡（南側）全体図

II 代表的な遺構・遺物

縄文時代

第1号集石

本集石は調査区北部に位置する。確認面は黄褐色土層上面である。礫は大形で、掌大より幼児の頭程度である。熱による影響は一部のものに色調変化が認められたが、他は不明である。また、破損礫は少なく、完形のものが大多数を占めていた。個数は約300個程度である。集石下には土壤が存在しており、当土壤底面まで礫が及んでいた。土壤の平面形は長軸1.66m×短軸1.40mの楕円形を呈しており、断面形は深さ54cmの鍋底状を呈している。底面は比較的平坦で、壁はほぼ直立する。出土遺物は無い。

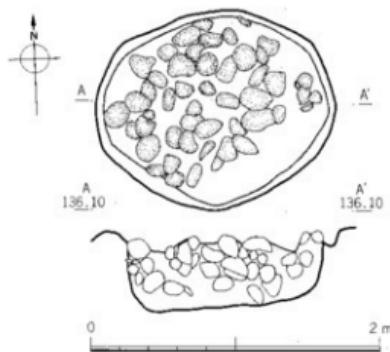


図2 1号集石

第88号住居址

本住居址は調査区北部に位置する。北東部をH-85号住居址により切られており、また、同部の床面下に倒木痕が認められている。

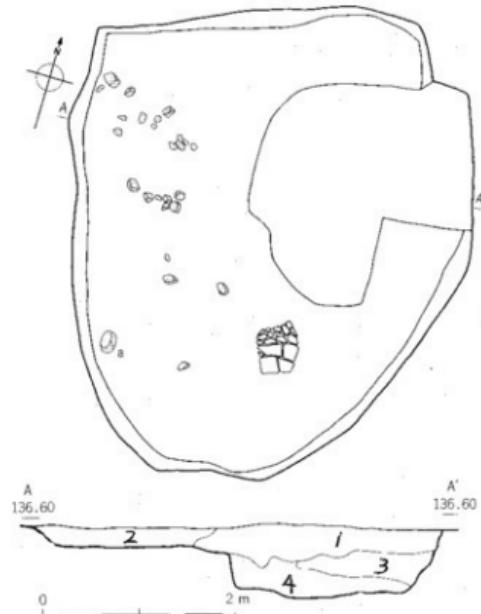
平面形は長軸5.06m、短軸4.18mの馬蹄形を呈す。長軸方向はN-20°-Wである。壁はゆるく傾斜し、高さ20cm程度である。柱穴および炉址は検出されなかった。床面は中央部より西部にかけて、締り良好である。

遺物は床面より深鉢形土器1個体、覆土より石斧2点が出土。

出土遺物

1は諸磯a式の深鉢形土器である。

口縁部および底部と胴部1/4を欠損す



1. 黄褐色土 (やや暗) 白色粘石 (φ1~3mm) 少や多。粘性重 (締り) 大變良。
2. 黄褐色土 白色粘石 (φ1~3mm) 多。陶灰に1層ブロック (φ2~3mm) 粘性やや重 (締り) 良。
3. 明黄褐色土 ローム粘多。粘性やや良。しまり良。
4. 淡色土 白色粘石 (φ1~3mm) 少。粘性やや良。しまり良。2層ブロックを複数に含む。

図3 88号住居址

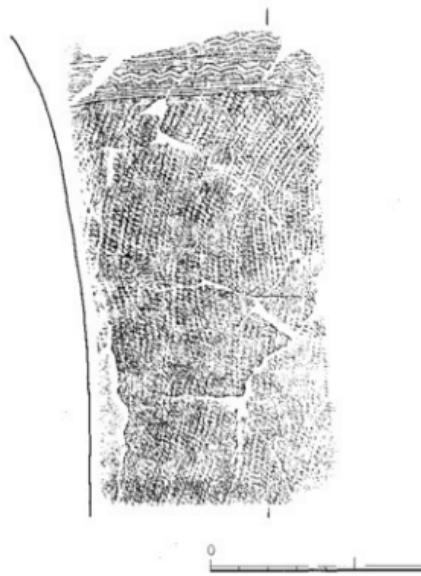


図4 88号居住址出土遺物-1

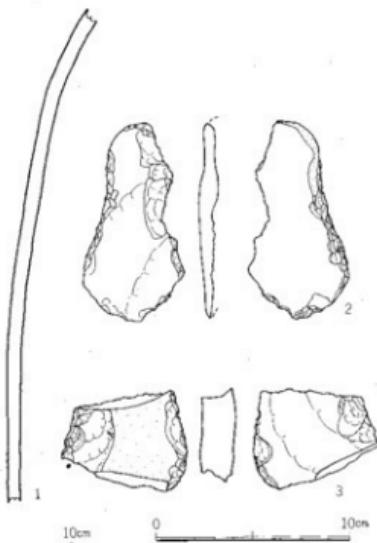


図5 88号居住址出土遺物-2

る。口縁部には5本1組の平行線と波状文が、胴部にR Lの網文が施される。胎土は砂礫を多量に含む。焼成は良好で、色調は明赤橙色である。2は打製石斧である。片面および全体の約1/3が欠損剥落している。撥形を呈し、刃部が丸味をもつ。一部に疊面を残す。刃部先端には使用による磨耗が認められる。3は打製石斧である。頭部および刃部を欠損する。刃部は残存部より見ると丸味をもつと推定される。一部に疊面を残し、両面より加工されている。

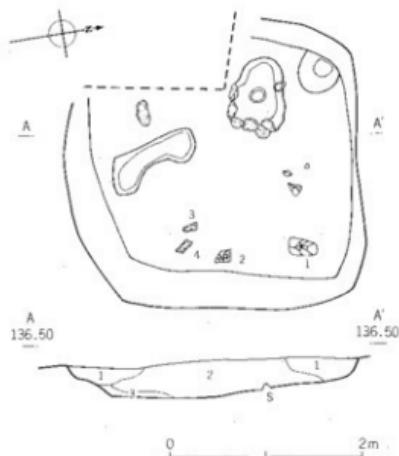
第89号居住址

本居住址は調査区の北部に位置する。本居住址の南西部をH-81号居住址が切っている。平面形は東西3.04m×南北3.04mの隅丸方形である。主軸方位はN-80°-Wである。炉址は居住址北西部に存在し、石囲の埋甕炉である。石囲は長軸80cm、短軸55cm、深さ5cmの梢円形を呈す土壌の東南より検出され、本来は全周していたと思われる。石囲の甕は長径が7~8cmで、全て熱を受け、色調等に変化が認められる。埋甕炉はこの石囲された土壌のはば中央部に埋め込まれている。埋甕は口縁部を欠くが、底部が残存しており、上部を数cm残して埋め込まれている。炉内の

焼土は埋甕内に若干の集中が認められるにすぎない。柱穴は検出されていないが、床面北西部と南部にピットが2基検出されている。ともに性格は不明である。壁はゆるく傾斜する。床は軟弱である。遺物は覆土より土器1個体、石斧2点、床面より埋甕炉の土器1点である。

出土遺物

1は深鉢形土器である。胴部がふくらみ、頸部がややすぼまる。口縁部は欠損して不明である。



胴部には縦位の繩文が施される。2は深鉢形土器である。出土時には胴部上部以上を残していたが、保存状況が極めて悪く、復原不可能のため口縁部破片を報告する。器形はキャリバー形を呈す。上部に隆起線による過巻文を配し、下部に縦位の繩文を施す。3は打製石斧である。撥形を呈し、片面に自然面を残しており、側面を丁寧に加工している。4は打製石斧である。撥形を呈し、刃部に自然面を残している。

1. 淡色土。軽石（φ2~3mm）少。粘性墨く締り良。
2. 暗褐色土。ローラー粒（φ1mm）若干。炭化物（φ2~3mm）少。粘性墨く締り良。
3. 黄褐色土。ローラー粒（φ1mm）多。炭化物（φ2~3mm）少。粘性墨く締り良。

図6 89号住居址

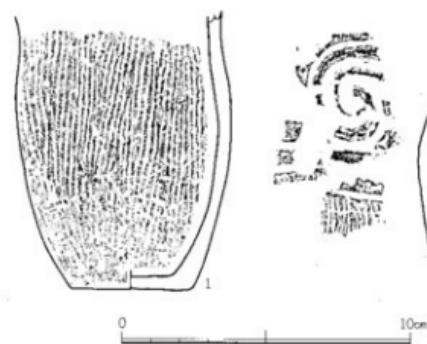


図7 89号住居址出土遺物-1

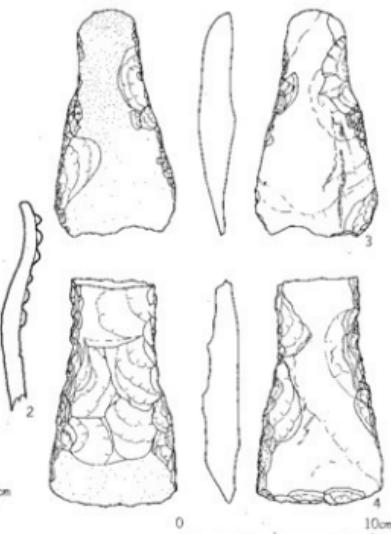


図8 89号住居址出土遺物-2

古墳時代

第69号住居址

本址は調査区中央部に位置する。平面形は東西5.3m、南北5.6mの方形を呈す。主軸方位はN-78°-Eである。床面は良好である。壁は直立し、高37cm程度である。柱穴は4本である。周溝は東壁北半部から南壁西部まで存在する。断面形は幅14cm、深さ7cmのU字形を呈している。住居址南東隅のかまど脇に貯蔵穴が位置する。平面形は長軸95cm、短軸55cmの長方形を呈している。深さは床面より39cm程度で、底面は平坦、壁は直立する。この他に住居址南部中央に径24cmの円形のピットが存在する。

かまどは東壁の南部より検出されている。残存状況は比較的良好で、天井部はすでに崩れ落ちている。袖は黄褐色粘質ロームにより構築されており、左袖が壁より96cm、右袖が壁より85cm程度で平行して伸びている。焚口は川原石を倒立させて構築している。火床は熱の影響が認められるが、赤色化しておらず、あるいは焼土の抜き取りが行なわれているのかもしれない。また、火床面の最奥部に自然石を用いた支脚が存在している。煙道部は壁の上部を掘り込んで構築されており、下部は壁そのままである。壁外の部分は強い傾斜をもち、壁より24cm程度伸びている。平面形はU字形で、断面形もU字形である。

遺物は覆土下部から床面にかけて多量に出土する。覆土中位で径20~30cm大の川原石が多数存在していた。また、本住居址の床面から床面より5cm程度の間に炭化材が多数認められた。この炭化材は壁際が高く、中央部が床面に接している。

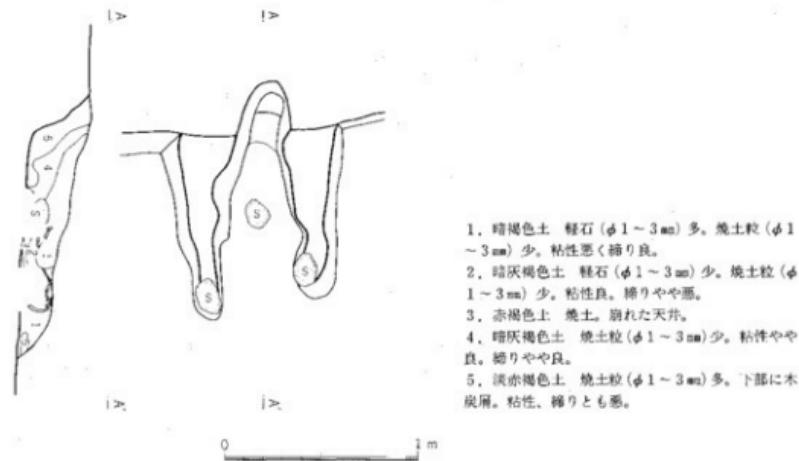
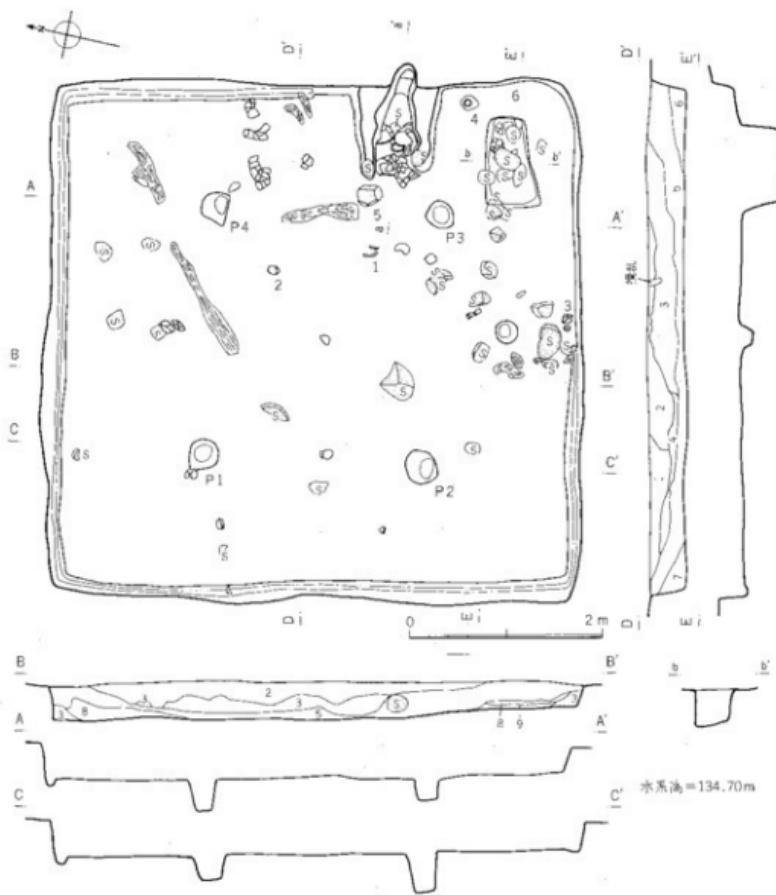


図9 69号住居址かまど



1. 暗褐色土 鞣石 ($\phi 3\text{ mm}$) 多。ローム粒 ($\phi 1\text{~}3\text{ mm}$) 少。
粘性悪く、繰り良。
2. 黒褐色土 鞣石 ($\phi 3\text{ mm}$) 多。ローム塊 ($\phi 1\text{~}2\text{ cm}$) 少。
粘性悪く、繰り良。
3. 黄褐色土 鞣石 ($\phi 3\text{ mm}$) やや少。ローム塊 ($\phi 1\text{~}5\text{ cm}$)、ローム粒 ($\phi 1\text{~}3\text{ mm}$) 多。
黒色土塊(鉄石含む)少。粘性悪く繰りやや良。
4. 暗褐色土 ロームブロック ($\phi 1\text{ cm}$) 多。鞣石 ($\phi 1\text{~}3\text{ mm}$) やや多。
粘性悪く、繰り良。
5. 褐色土 鞣石 ($\phi 1\text{~}3\text{ mm}$) やや多。燒土粒 ($\phi 1\text{ mm}$) 少。炭化物 ($\phi 1\text{ mm}$) 少。
粘性ややある。繰りやや良。
6. 黄褐色土 ロームブロック ($\phi 2\text{ cm}$) 多。
7. 暗褐色土 鞣石 ($\phi 1\text{~}3\text{ mm}$) 少。ロームブロック ($\phi 1\text{~}2\text{ mm}$) 多。
粘性悪く、繰り良。
8. 暗褐色土 鞣石 ($\phi 1\text{~}3\text{ mm}$) 若干。粘性ややあり、繰り悪し。
9. 暗褐色土 大小の木炭を多く含む。粘性ややあり、繰り悪し。

図10 69号住居址

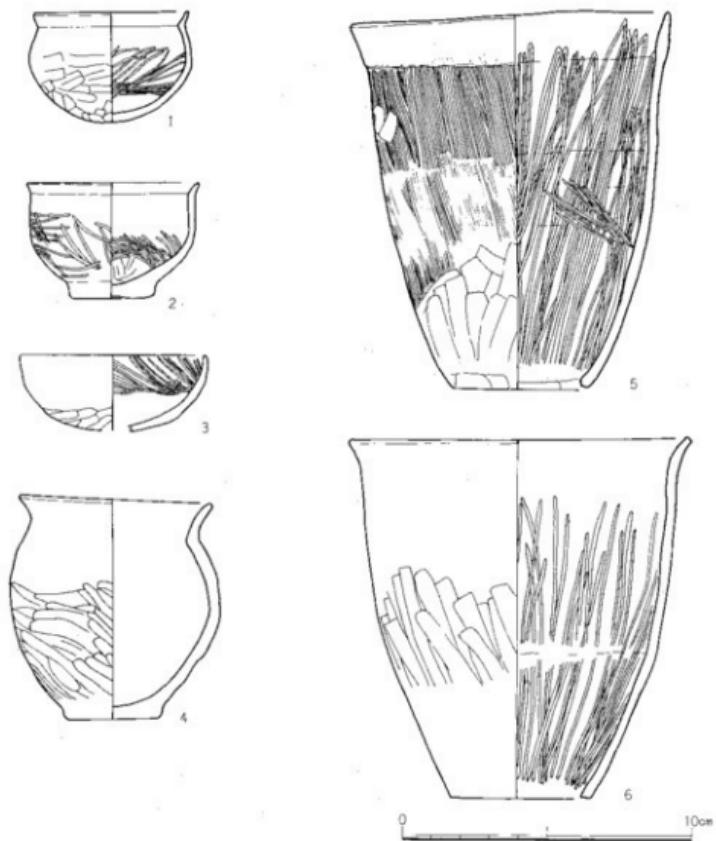


図11 69号住居址出土遺物

表1

No.	器形	法量	器 形 の 特 徴	外 表 調 整	内 表 調 整	
1	环	10.6 7.7 —	腹部～底部は球形。口縁部は内斜口縁を呈す。	口縁部模施で後、腹部～底部を丁寧な削りを施す。	口縁部～腹部を複数の窓で削した後、左下りの尾房きを左通りに施す。	①色調②焼成③現行 ④始土⑤備考 ⑥赤赤⑦良好⑧完形 ⑨砂礫若干含む。
2	环	12.0 8.1 5.4	腹部はやや張りをもつ。平底。口縁部外反する。	口縁部模施で後、腹部に粗造な磨きを施す。	口縁部～側部を複数の窓で削した後、粗造な磨きを施す。	⑩明赤澄⑪やや良好⑫ ⑬完形⑭砂礫を含む。

表2

No	器形	法量	器 形 の 特 徴	外 面 調 整	内 面 調 整	①色調②焼成③残存 ④胎土⑤備考
3	坏	12.8 — —	半球形の体部。	口縁部挫傷で、体部削り。	口縁部～体部を擦で後、右下がりの荒磨きを右回りに施す。	①暗赤②良好③焼成④砂礫若干含む。
4	小甕	13.2 15.3 6.2	やや突出気味の平底。長削化傾向にある肩部。	口縁部挫傷で、肩部木口状工具による施での後、中位以下を右下から左上への削り。	口縁部挫傷で、肩部荒削で、右下から左上への削りを施す。	①暗赤②良好③完形④腰を多く含む。
5	瓶	22 26 8	複合口縁。	口縁部挫傷で、肩部上位木口状工具による複数の削り、下位を削り。	挫傷で後、腰の荒磨き。	
6	瓶	23.4 25 8	外反する口縁部。	口縁部挫傷で、肩部粗位の丁寧な削りの後、中位を斜状の削り。	口縁部挫傷で、肩部粗位の削り。	①灰白色②やや不良③ほぼ完形④腰を多く含む。

第80号住居址

本住居址は調査北部に位置し、住居址北東部を70号土壙により切られている。平面形は東西を4.5m、南北を3.75mの長方形を呈す。主軸方位はN-115°-Eである。床面は堅緻である。壁はほぼ直立するが、部分的に傾斜している。柱穴は認められない。周溝は北壁および西壁に認められ、半周する。深さは5cm、幅は15cmである。貯蔵穴は東壁南部のかまど脇より検出された。平面形は長軸58cm×短軸43cmの隅丸方形を呈し、深さ30cmである。底面は平坦である。壁はやや傾斜をもって立ち上がる。

かまどは東壁南部より検出されている。残存状況は天井部の大部分が崩落しており、左袖が70号土壙により破壊されている。袖は黄褐色粘質ロームにより構築されている。焚口は川原石の立石を使用している。火床は焼土化しており、川原石の支脚が認められる。煙道部は壁外に細長く延びており、ゆるやかな傾斜をもって立ち上がる。

遺物は比較的少なかったが、かまどの右袖脇より變形土器が2点、貯蔵穴内より變形土器が1点、かまど内より變形土器が1点出土している。

70号土壙

平面形は東西1.83m×南北1.83mの方形を呈す。深さは0.8mである。底面は平坦である。

表3

No	器形	法量	器 形 の 特 徴	外 面 調 整	内 面 調 整	①色調②焼成③残存 ④胎土⑤備考
1	坏	11.5 6 6.1	底部は小さく、上円底。口縁部は内丸気味となる。	口縁部挫傷で、体部は右から左への傾斜の削り。	口縁部挫傷で、体部木口状工具による削で後、挫傷で。	①赤褐色②良好③口縁部欠損④砂礫少量含む。
2	甕	16 22.8 5.4	くの字状口縁部。張りのある肩部。	口縁部挫傷で、肩部上半丁寧な指標による削で、下半削り後、丁寧な指標による削で。	口縁部挫傷で、肩部是無。	①赤褐色②良好③完形④腰を含む。
3	甕	14 — —	くの字状口縁部。張りのある肩部。	口縁部挫傷で、肩部上位に粗位の木口状工具による削で後、下位を精位の削で。	口縁部挫傷で、肩部削。	①黒褐色②良好③肩下部欠損④腰を含む。

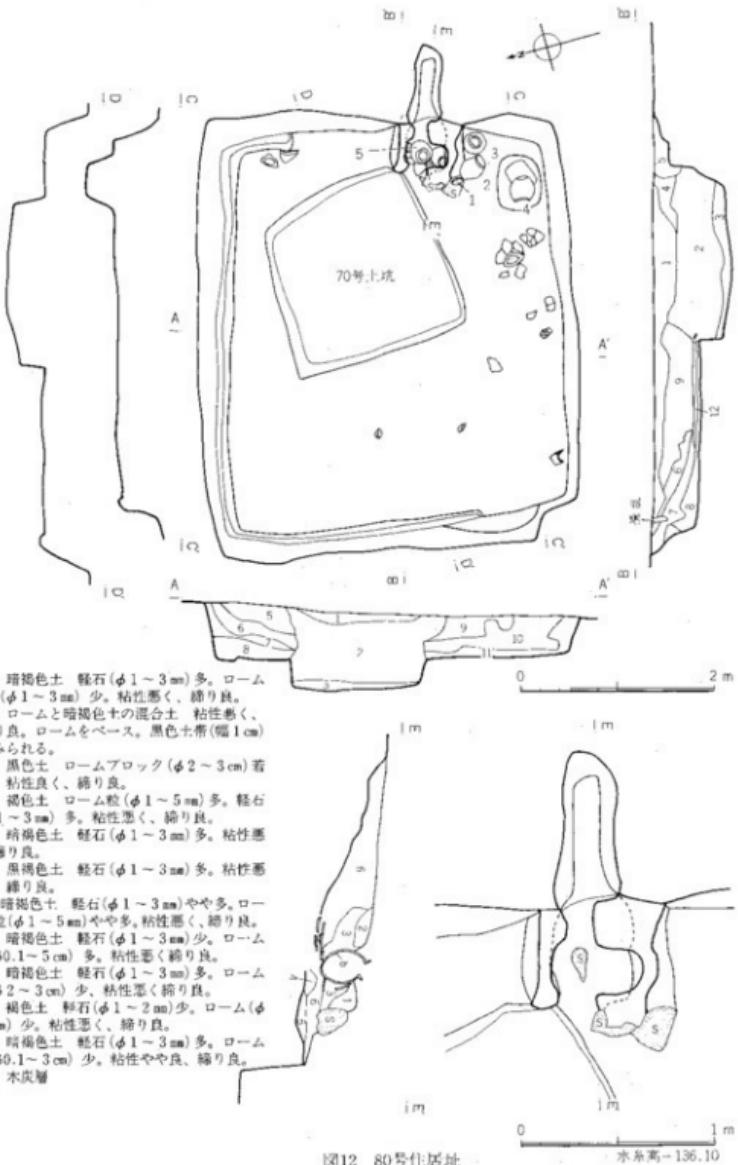


図12 80号住居址

図12
80号住居址かまと

1. 暗褐色土 黄褐色ローム質粘土 ($\phi 1 \sim 50\text{mm}$) 多。焼土粒 ($\phi 2 \sim 3\text{mm}$) 少。鉢石 ($2 \sim 3\text{mm}$) 少。
粘性やや悪く、練り良。
2. 暗褐色土 鉢石 ($\phi 2 \sim 3\text{mm}$) 多。焼土粒 ($\phi 2 \sim 3\text{mm}$) 少。粘性悪く、練り良。
3. 暗褐色土 鉢石 ($\phi 2 \sim 3\text{mm}$) 少。焼土粒 ($\phi 1 \sim 5\text{mm}$) 多。粘性悪く、練り良。
4. 黒褐色土 ローム ($\phi 0.5 \sim 1\text{mm}$) 多。粘性悪く、練り良。
5. 淡赤褐色土 焼土。火床。
6. 明赤褐色土 焼土。袖。

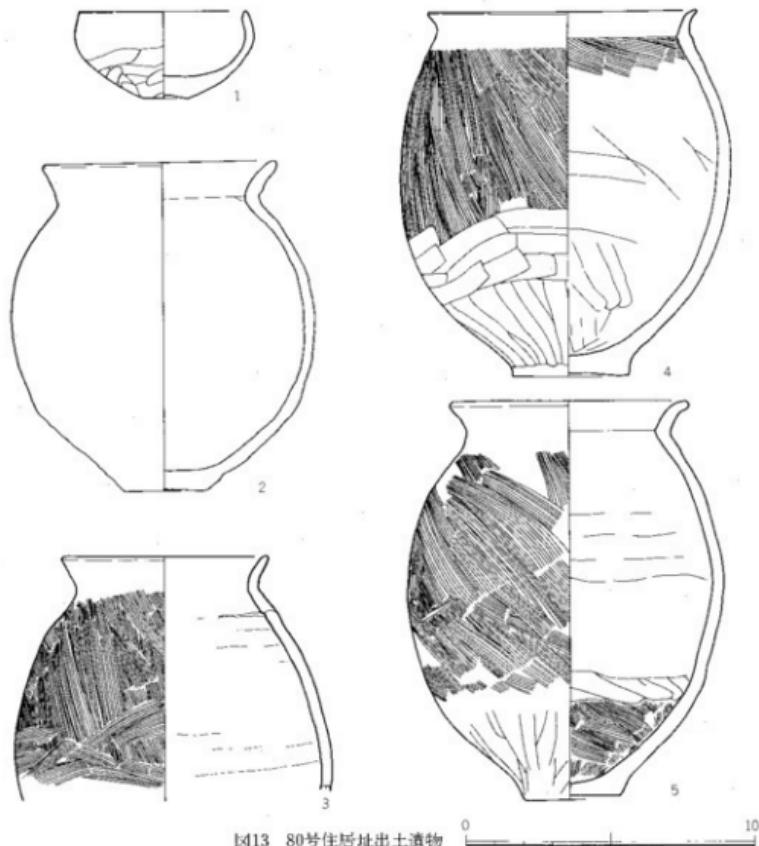


図13 80号住居址出土遺物

表4

No	器形	法量	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調②焼成③状態 ④粘土⑤備考
4	甕	18.6 25.4 8.2	短く外反する口縁部。強い張りをもつ 胴部。上げ蒸気穴の底部。	脚部を斜位の木口状工具による擦で 後、口縁部横擦で、胴部下半を棍棒の 削り。	口縁部横擦で。胴部上端を 木口状工具による擦で。胴部を擦で。 下半は木口状工具により擦 で後、一部を棍棒の削り。	①黒褐色②良好③元形④ 粘土⑤備考
5	甕	16.2 27.8 6.4	上げ蒸気穴の底部。長軸化傾向の腹部。	脚部を斜位の木口状工具による擦で 後、口縁部横擦で。胴下部は不明。	口縁部横擦で。脚上半擦で。 下半は木口状工具により擦 で後、一部を棍棒の削り。	①暗褐色②良好③ほぼ完 整④粘土を含む。

III まとめ

今回の調査で検出された遺構は縄文時代が住居址2軒と集石1基、古墳時代が住居址24軒と土壙29基である。

縄文時代の遺構は今回の調査区の北部に集中しており、遺物は調査区全域に散在している。住居址は諸磯a式期と加曾E式期の各1軒が検出されている。両時期の住居址は前回までに調査された九料遺跡北側において検出されていない。また、両住居址とも遺物の出土が極端に少なく、周辺に他の遺構が存在したとは思われない。両時期とも単独短期に形成された遺跡と考えられる。集石は遺物の出土が皆無のため詳細な時期は不明である。

古墳時代の住居址は全て鬼高窓の所産で、鬼高窓でも内斜口縁部を有す坏等から古い段階を示すと考えられ、5世紀後半から6世紀前半にかけて形成された住居址群と考えられる。この時期の住居址は前回まで調査された九料遺跡北側にも多数存在している。今回調査した九料遺跡南側はその集落の継ぎになるわけだが、両調査区において住居址の様相に若干の差が認められる。まず第一に、北側において張り出しピットをもつ大型住居址が3軒検出されているのにもかかわらず、南側においては皆無である。第2点として、北側では5m以下の住居址が3軒と少なく、南側では11軒と多く、相対的に面積の小さな住居址が多い。張り出しピットの存在や住居面積から本集落において北側が優位性を示すと考えられるが、この他に特殊な遺物の出土分布状況において北側へ集中する傾向が認められる。まず、管玉であるが、北側のH-56号住居址2点、南側の第84号住居址1点、第82号住居址1点から出土しているが、南側の2住居址はとともに北側寄りに位置している。この点からも本集落北部に社会的中心が存在した可能性が想定できる。

土壙は伴出した遺物がほとんど無く、出土したとしても土師器の細片のみである。そのため、住居址との関係より時期を決定せざる得ない。土壙はその分布を住居址群と一致させるように検出されており、いくつかの土壙は住居址と重複関係をもっている。重複例は4基で、この内3基は住居址覆土上面より掘り込まれ、住居址よりも新しくなる。また、1基は住居址により切られしており、住居よりも古くなる。また、九料遺跡北側においても3基が住居により切られている例が存在している。以上より、土壙は鬼高窓の集落に伴うものと考えられる。



写真1　遺跡近景（北から）



写真2　1号集石



写真3 88号住居址



写真4 89号住居址



写真5 69号住居址



写真6 80号住居址



88号住居址



89号住居址



1



2



3



4



5



6

69号住居址



1



3



2



4



5

80号住居址

写真7 出土遺物（88号・89号・69号・80号）

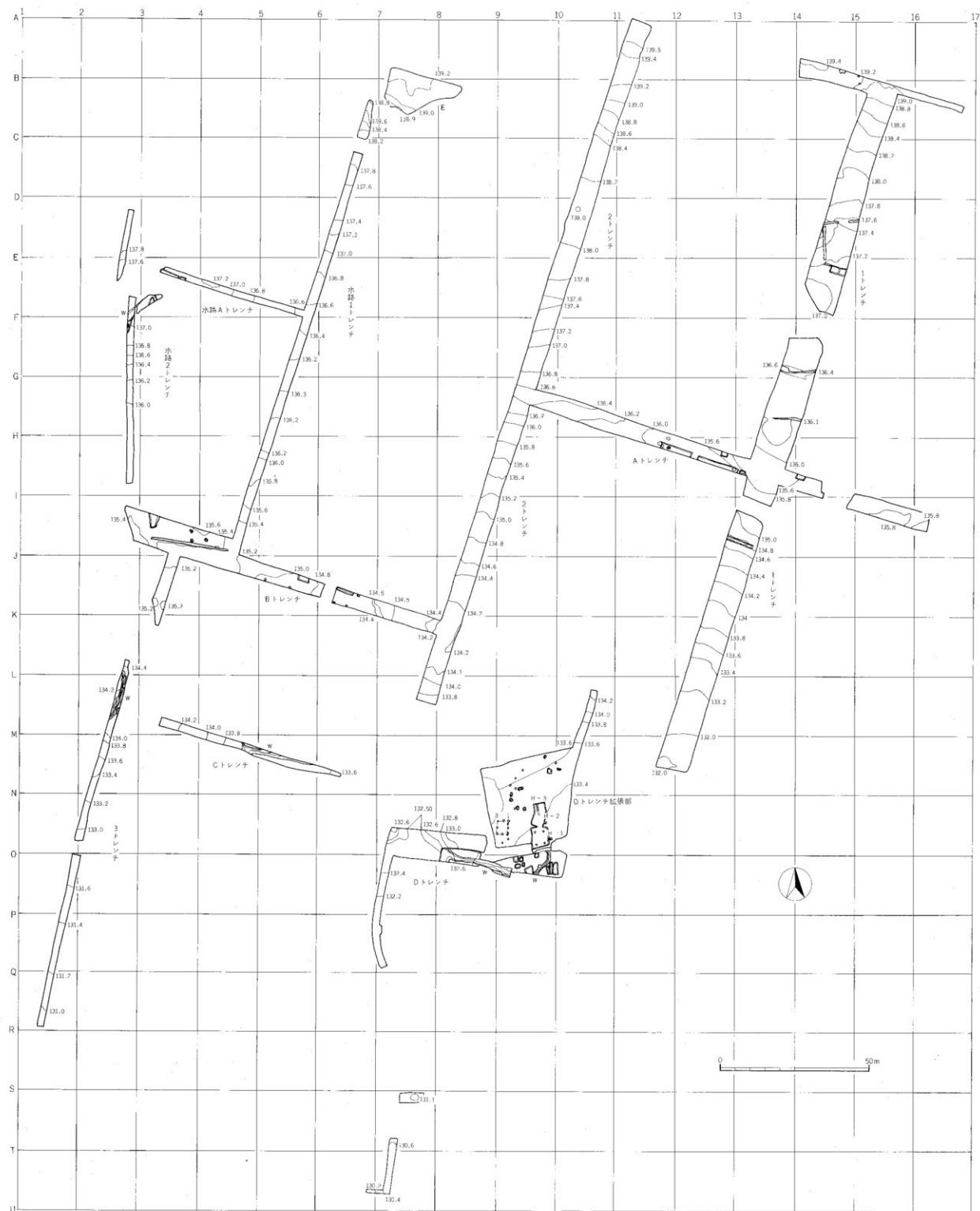
61 C - 4
小神明遺跡 V

昭和62年3月20日 印刷

昭和62年3月31日 発行

編集・発行 前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目12番1号

印 刷 上海印刷工業株式会社
前橋市天川大島町305-1



付図 小神明遺跡群V遺跡全休図 (1/1000)

前嶺市教育委員會